國語讀本

新制版

巻七

4a
810
昭9

41625
教科書文庫
4
810
41-1933
20000
65656

資料室

文部省檢定濟
昭和八年二月廿五日・中學校國語漢文科用
昭和九年七月廿四日・實業學校國語科用

國語讀本 卷七

新制版

文學博士 上田萬年
榮田猛猪 共
鹽野新次郎 編

広島大学
教
65656
図書

42
810
昭9

國語讀本 卷七

目次

前篇

一 我々は日本人である　藤村作　一
二 月の三月堂　東伏見邦英　九
三 旅行論　山路愛山　一八
四 芭蕉の生活とその俳句　荻原井泉水　二四
五 奥の細道　松尾芭蕉　三四
六 杜鵑啼くころ　横山健堂　四三
七 百蟲譜　横井也有　四八

八 青年の志氣　賀川豐彦　五二
九 石彫獅子の賦　薄田泣菫　五八
一〇 「芳流閣」とその批評　瀧澤馬琴　大町桂月　六四
一一 戯作三昧　芥川龍之介　七三
一二 菅の荒野　八四
一三 心の花　佐佐木信綱　八八
一四 川柳點　金子元臣　九三
川柳七句　一〇〇
一五 雄辯道　土田杏村　一〇〇
一六 方丈記　鴨長明　一〇九
一 行く川の流　一〇九
二 世の不可思議　一一〇
三 日野山の閑居　一一三
一七 平家雜感　高山樗牛　一二〇
一八 光頼參内　（平治物語）　一二八
一九 國語の力　一三六

後篇

平家物語抄　一
平家物語に就いて（參考）　藤岡作太郎　一
一 祇園精舍の事　五

二　殿上の闇討の事　六
三　教訓の事　一二
四　足摺の事　二三
五　月見の事　二九
六　實盛最期の事　三二
七　忠度都落の事　三七
八　那須與一の事　四〇
九　大原御幸の事　四五

目次終

國語讀本　卷七

前篇

藤村作
福岡縣の人。國文學者。文學博士。東京帝國大學教授。

一　我々は日本人である

藤村作

我々は人間として生きるといふ事を否定するものではない。しかしながら、人間として生きるといふ事は、國民として生きるといふことを前提としなければ意義をなさない。なぜなれば、我々の生活の單位といふものは、國民としてであるからである。

言ふまでもなく、世界には多くの民族がある。それ等の民族は、それ〴〵特種な血を傳へ、特殊な靈を傳へてゐる。我々大和民族も、それ等の多くの民族の中の一であつて、自ら他民族と異なる肉

體と、精神と、歴史とをもつてゐる。ある醫家の説によれば、歐米人と日本人との動脈の組織は、全く異なるといふことである。我々は遺傳的に歴史的に、絶對に他民族と同一ではあり得ないのである。卽ち我々の肉體は日本民族の祖先から傳へられた肉體であり、我々の靈魂もあらゆる世界の他の人類から特殊である所の靈魂である。これ我々が何としても他の民族となる事を得ない理由である。かくして我々が人間であり得るのは、日本民族であることを通じてでなければならぬことが、明白に了解されるのである。されば我々は日本民族でなくして、絶對に人間たり得る事を得ないのである。換言すれば、我々が絶對的に日本人でなくなつた時、その刹那に於て、我々の人間としての存在は滅びるのである。それは我々は日本人としての特殊相に於てのみ、人間であり得る

からである。あたかも「花」といふ概念が、櫻の花・梅の花・ばらの花等の特殊な實在から抽象されたもので、一般的「花」といふものは存在しないやうに、「人間」といふことは、抽象的な觀念としてのみ考へられることである。

かく同一祖先から傳へられた肉體・靈魂の特徴を共通にもつてゐる我々日本民族が、團體的な結合をして、その傳統と歴史とに基く特徴に從つて、善美なる發展をなすことに努力するのは、如何にも自然なことであるのみならず、又きはめて大切なことである。自分の持つてゐる長所を育てゝ、これを健全に成長せしめて行くほど、他に對する大きな寄與はない。これを小にして考へて見れば、我々の日常生活に於ても、人おの〳〵その得意とする所に全力を致す時に、はじめて自分といふものを正しく完成する事が出來

ると同時に、社會全般をも向上せしめる事が出來るのである。民族相互の間に、その靈的方面から見ても、各分業的な努力のあるべきは當然の事である。

かく考へると、我々が日本國民として世界に生きる意義・使命は、他の民族の持たない特殊な國民性・國民精神を持つて生きるといふところにある。これを發展させ、又これを世界に擴充するところにある。

我々日本人の最も長じてゐる特徴の上に創造された文化を、世界に擴げることによつて、我々の最も大きな寄與が世界人類に向つてなされるであらう。もし我々が日本人としての自覺を喪失し、日本精神を失墜し、日本國民性を小さくしてしまつたならば、我我の世界に生きる意義は失はれ、我々の世界人類に對する使命は

滅びるであらう。日本國民でなくてはなし得ないやうな輝かしい特徴が示されてこそ、我々の世界に存在する意義が堂々と主張されるのである。日本國民として、何等の特質も實力も示されない時、凡庸民族又は無能民族の名のもとに世界から葬り去られても仕方がないであらう。

右の如き意味に於て、我々は人間として生きるといふ事を考へる前に、先づ日本國民として、最も正しく且大きく生きるといふことを考へなければならない。日本國民として最も正しく大きく生きるといふことは、先づ日本人として自己の姿を正しく認識し、強くこれを把握することに出發し、進んでこれを發展させ、更に全世界に向つてこれを擴充して行くことに他ならない。

我々は日本人である。苟くも日本人として、祖先の肉體と靈魂

ことを傳へてゐるものに、日本精神を持たないものはない。たとひそれが無意識の中に眠り、他の濁れる心によつて曇らされてゐても、何かの機會に日本人としての強く正しい意識が目醒めて來ることは疑を容れない。それはこれまで、多くの歷史上の事實が屢〻證明したところである。さきに關東大震火災の際、全國民によつて示された友愛、近く滿洲事變に當り、幾多の將士によつて示されてゐる忠烈、これ等は、みな美しい日本精神の發露である。方今世にはわが建國の大精神と相容れない危險思想が行はれ、帝國の前途に對して頗る憂慮すべきものがあつて、一時は思想國難の聲さへも起つたが、しかし、前述の如き幾多の事實は、本來の强く美しい日本精神が、これ等の排斥すべき危險思想によつて、何等うちくだかれてゐないことを完全に證明してゐる。卽ち平穩無事の日、日

本人としての强烈な意識は、心のどこかに眠り、他の曇れる精神に蔽はれてゐても、何かの機會を見出すと、必ず心の曇りを破り、炎のやうに烈々と燃え上つて來ることが、多くの事實によつて證明されるのである。

上述の如く、日本人たるものは、誰一人として日本精神を持たないものはない。時によつて、場合によつて、日本人としての自覺が眠るやうな事もあるが、それは休息してゐるのであつて、消失してしまつてゐるのではない。それ故に日本人としての國民的自覺を喚び起す機會となる國家的な事變や對外的な諸問題は、日本精神を訓練する有力な條件となるのである。けれどもそれ等は外面的な條件であつて、極めて他律的である。我々は、たゞそんな消極的な狀態に滿足すべきではない。むしろ國民全體が、かゝる外

面的事件の有無にかゝはらず、常に進んで自主的に、內面的に日本人としての自覺を深め、教養を重ね、傳統的な日本精神を正しく大きく訓練して行くやうになることを望むのである。卽ち、自ら進んで日本及び日本的なるものを凝視し、批判し、發展させることに、國民全體の注意が集中されるやうになることを熱望するのである。

然らば積極的に「日本」を認識するには如何なる方法によるべきであるか。これには二つの方面がある。第一は「日本」自らに卽して、その本質を把握することであり、第二は外國を知ることによつて、日本を識ることである。前者は、內にゐて內を整へることであり、後者は外に出て內を眺めることである。この二者は兩立すべきもので、一方に偏してはならない。もし前者に偏すれば、褊狹な

る「我」に執することゝなり、日本精神の公明正大は曇らされるであらう。もし後者に偏すれば、自己の獨自性を忘れ奴隸の如く自らを卑下する結果となるであらう。されば、この兩者は車の兩輪の如く、互に相扶けて、以て祖國日本を正當に認識しなければならないが、現代の實狀から言へば、國民はあまりに自己を知らなすぎるのである。あまりに傳統を輕視してゐるのである。されば現下の我々としては、先づ何よりも日本人であるといふ意識のもとに、自己を知るといふことが、最も急務であると思ふ。（國語教育論）

東伏見邦英　伯爵。久邇宮家より出でて臣籍に列せられた方。

三月堂　東大寺に屬する。一名法華堂。天平五年（一三三）良辨の創建。本尊は不空羂索觀音。

サロン　Salon.（佛蘭西語）客室。

二　月の三月堂

東伏見邦英

法隆寺へ行つた日の夜の事でした。晝間あんなに僕等を苦しめた雨は、夕食の濟んだ頃にはすつかり止んで、サロンの窓を明け

ると、すが〳〵しい風が靜かにカーテンのレースをなびかせて居ました。未だ止んで間もないと見えて、木の葉といふ木の葉、草といふ草は、盡く露を宿して美しくかゞやいて居ます。新池の水面は一面に靄が立ちこめて、菊水の燈火はぼんやりとしか見えません。此の靜寂な古都の朧夜に、何處からともなく傳へ聞く樂の音も詩趣多いものですが、それにもまして力强く僕に迫るもの、それはすべての不淨を流し去つた時の大地の匂と、そして梢から滴る水の音です。ぽたり、ぽたり、又ぽたり。椿の花が水面に落ちるやうな、そしてもつと〳〵澄んだ、はれ〴〵した、落着きのある、底力のある音です。今眼の前の一滴が落ちました。きら〳〵と美しく光りながら。

今晩は滿月に當つて居ます。月に對して特別の感興を起す僕

御蓋山　三笠山。奈良市春日山の西方にある山。今は若草山ともいふ。

イースター　Easter. 復活祭。キリストの復活を記念する祭。

高圓山　奈良市の東南に聳える山。春日山の南に並ぶ。

は、この二三日、御蓋山から登る月を、どんなによろこんで見て居たか知れません。四月の滿月はイースターの日を定めます。全キリスト教徒にとつて、何等かの意義ある滿月です。併し雨は止んだとはいへ、空一面は淡雲で覆はれ、あたら名月は徒らに雲の裏面のみを照して、淡雲をとほして漏れる月光は、見る人をして夢のやうな淡い感じを起させます。

ふと頭を窓外に廻らすと、さつきまで大空一面とぢこめて居た淡雲は、何時の間にか、拭ひ去られて、月が出て居るではありませんか、あこがれの明月が。もう御蓋山からは大分離れて、高圓山のあたりに輝いて居ます。思はずも僕は外へとび出してしまひました。新池に崩れる月、五重塔の甍の反射。僕等の足は知らず〳〵三月堂へと向つて公園の中を、少し寒いので、せつせと歩いて居ま

した。奈良朝の我々の祖先の幾家族かは、何代かに亙つてこの邊にも住んで居たでせう。そして月明の夜などには、やはりこの雪消の澤の邊をさまよつた事もあつたでせう。人一人通らぬこのあたりの大木の梢に隱見する月は一寸凄く感じられます。僕等は南大門の方へまがる道を間違へたので、結局若草山の麓から三月堂へとまはることになりました。晝間の賑かさに比べて夜の靜けさ、何とひどい變化でせう。土産物を賣る店はすつかり閉ぢて、料亭も軒端にたつた一つ灯が淋しくついて居るだけです。

若草山は靜かに眠つて居る。鹿も居ない。時々松が風に搖れる。道が光り、道の小石が光る。光る道の上を影法師がする〳〵動いて行く。そして手向山八幡の横から三月堂の前へ出ました。鎌倉時代の附加である三月堂の低い禮堂の屋根が、月光を一杯に

南大門　東大寺の南正面の總門。

手向山八幡　品陀別命ほか二神を祀る。奈良市雜司町。

あびて居ます。

三月堂よ、何とおまへの姿は美しいことだらう。すつかり僕の心は捉へられてしまつた。僕は決して始めておまへを見たのではない。幾度かおまへを訪れたことがある。而も一度もおまへの姿を氣をつけて見たことがなかつた。僕がおまへを訪れるのは、おまへの中にしまつてある月光に逢ふ爲だ。月光にさへ逢へれば僕は滿足して、さつさと歸つてしまつたのだ。日光もいゝ。執金剛神も立派だ。御厨子の中の吉祥天も辨財天もいゝ。殊に吉祥天のあのうぶな顏に僕は愛着を覺える。併し、僕はそのどれよりも月光

三月堂月光菩薩

月光・日光　月光菩薩・日光菩薩。行基の作といひ傳へる。

執金剛神　佛法を守護する神（力士）。金剛杵を手にしてゐるのでいふ。

吉祥天　吉祥天女、衆生に大功德を與へる天女。左手に如意寶珠を捧げてゐる。

辨財天　辯舌・智慧の功德ある天女。略して辨天といふ。又、音樂にも秀でてゐたといふ。

梵天　佛教保護の神。梵天王・梵王ともいふ。
帝釋　帝釋天。喜見城を居城とする。佛のために修羅と戰ふので名高い。
四天王　持國天・增長天・廣目天・多聞天の四王。帝釋天の外臣であるといふ。

が好きだ。まだ外に乾漆の大きな像が澤山ある。第一に本尊がさうだし、梵天も、帝釋も、四天王も仁王もさうだ。それに木彫の不動二童子、地藏の半跏像もある。どれもこれも皆立派な作品ではあるが、僕の心に映ずる月光の姿には及びもつかない。僕はいつも三月堂に來て、月光を見て歸つたと言つてもいゝ。

今日はいくら見たくても、扉がしまつて居る。あの清らかな姿、あの熱情のこもつた信仰の權化の姿を思ひ浮べながら、僕はおまへのまはりを歩きまはつた。そして僕はおまへの美しさに驚かされてしまつたのだ。それからおまへの美の秘密を探らうとしたところで、月光が永遠に僕の心を壓倒したと同じやうに、おまへの美は僕を壓倒してしまつた。秘密を探らうとした僕の考がそ

もそも間違つてゐたのだ。唯僕はおまへの美しさの中に溶け込んでしまへばよかつたのだ。さうすれば、おまへの美しさが優れた藝術家の直觀であつたにしても、僕の心はその藝術家の美しい境地に到達し得る筈だつたのだ。時間の藝術、音の藝術の上で、僕は度々それを經驗した。今は空間の藝術、建築の上でそれを味ひ得る。それはおまへと、おまへの前に小さな黑い影を落して居る僕との對立の上に存在するものではない。この二つの物の間にある凡ての障碍は取りのぞかれ、僕の心は全くおまへの美に抱擁されて居る。それは藝術の領域を超えて、宗教の領域に入つて居るのだ。僕はこの宗教的な境地に、十分に陶醉し得る僕を幸福だと思ふ。どんなに偉い宗教家だつて、この境地に到達し得ることは一生の中にさう度々あるものではあるまい。僕は藝術を媒介

二月堂
東大寺大佛殿の東、手向山の西麓丘上にある。天平勝寶四年（一四二）實忠の創建。本尊は十一面觀音。

新藥師寺
華嚴宗の寺。奈良市高畠にある。天平十九年（一四〇七）光明皇后が行基に命じて建てさせられたといふ。

三月堂側面

とした方が、ずつと樂にこの境地に到達し得るものだと思ふ。

月はもう大分傾きかけた。しかも僕は二月堂へ上つて、あの舞臺から月に照された生駒山の方を見たいやうな氣がする。おまへの美しさに驚きながら、僕はもうおまへと別れねばならない。こゝで僕は或人の言葉を思ひ出す。三月堂は鎌倉時代に補足せられた禮堂の爲に綜觀を缺き、新藥師寺金堂は規模が小さい爲に云々と、惡口を言つて居る。僕はこれはおまへ

忍辱山圓成寺
眞言宗の寺。奈良縣添上郡大柳生村にある。天平勝寶八年（一四六）の創立であるといふ。

の美しさを本當に味ひ得ない人の言葉だと思ふ。天平建築を餘り崇めすぎる人は、法華堂が禮堂の爲に其の美しさをこはされたと思ふだらう。併し僕は禮堂あるが故に、法華堂は、日本建築では稀に見る複雜した美を誇り得るのだと思ふ。總てが整ひすぎてゐる美しさより、弱點のある美しさの方が親しみ易いやうに思はれる。又新藥師寺の金堂が規模が小なるが故にだめだと云ふやうな事も考へられない事だ。忍辱山圓成寺の境内にある春日堂と白山堂は、最古の春日造であるばかりでなく、最も美しい春日造だ。しかも高さは僕の丈より少し高い位で、四五人で持ち運びが出來る位な大きさだ。おまへも天平建築としては決して大きい方ではない。殊に本堂だけなら新藥師寺金堂よりも小さいだらう。建築は量によつて美しいのではなく、質によつて美しいので

あるといふことを、特に强調したいと思ふ。

では三月堂よ、いよ〳〵お別れをする時が來た。（寶雲抄）

三　旅行論

山路愛山

風水相擊ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものに非ず。我をして自ら進んで自然の中に住せしめよ、自然も亦旋りて我が中に住むべきなり。我動けば自然も亦動く。我の中に在る天才は、自然の光景に觸れて始めて感興を湧出す。昔は一室に坐して秋風白河の關を詠じたる人もあり、坐ながらにして名所を知れる歌人もありき。而も是自然の神髓に達すべき道にはあらず。自然は唯質問を發する者にのみ答辯を與へ、來りて見る者にのみ教訓を與ふるものなり。

山路愛山
名は彌吉。沼津の人。評論家。大正六年歿、年五十四。

秋風白河の關
都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關（能因法師）

試みに千山萬水を跋渉し、而して後首を回して故郷を見よ。如何なる感情の此の間に生ずべきか。幼時より馴れ來れる某山某水は、始めて遙かなる天に輝ける星の下の物となるに非ずや。心なくして飛ぶ雲も、夕日も、波濤も、人をして故郷を聯想せしむる媒介となるに非ずや。無趣味なる青空も、故郷の方の天とし云へば、大に詩趣を生ずるに非ずや。人は自ら廻轉して、自然も亦其の態を變ず。昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり。今朝杖底の千岩は卽ち明日亦天邊の寸碧なり。甕中に在る者は甕の大小を知らず。身を轉じて甕外に在りて始めて甕の全形を知る。故郷とは何ぞや。現在の自己より過去の自己を眺むる感興なり。嘗て我は、蜻蜓を釣らんとして野外に遊びたる小兒なりき。溪流に網を投じて魚を捕へたる頑童なりき。其の岸に垂れたる楊柳、其の

野に咲きたる杜鵑花、我は毫も其の奇なるを感ぜざりき。然れども我は故郷を去りて天涯の遊子となれり。位置と境遇との異れる我は、始めて過去の位置と境遇とに在りし我を客觀的に見ることを得たり。而して嘗て我を圍みて而も我に何の感興も與へざりし自然は、始めて我をして涙を零さしむるものとなれり。是旅行が吾人に與ふる詩趣の中に於て、最も味あるものに非ずや。

舟に棹さして長き川を下れば、四山の面目畫屏の如く、時若し夏の初ならば杜鵑花・霧島、紅の雨を降らし、時若し秋ならば、兩岸の蘆荻風に鳴る。時々刻々に變化する光景、人をして知らず覺えず自然の吸引する所たらしむ。若しくは放翁の歌へる如く、「山重水複疑無路、柳暗花明又一村。」前面に鬱々たる山あり、舵師棹を暗中に揮ふ、前途既に窮するが如し、忽ちにして山廻り天濶く、鷄犬聲あり、

放翁　南宋の詩人陸游の號。この詩は「遊山西村」と題するもの。

田畝開け、桃源一村、人をして世界の霽明を歌はしむるものあり。此の時此の情、果して如何ぞや。或は天寒くして毛氈に身を包み、柔櫓の聲に眠を催しながら、覺むるが如く眠るが如く、有るが如く、無きが如き間に於て、須臾に變じ行く兩岸のパノラマを樂しむが如き、如何に沒風流の徒と雖も、終に黃金以外眞の娛樂あることを知るに至るべきなり。

或は又朝まだきに旅立すれば、駒の歩みに連れて茅屋の軒も動き、絲の如くなる炊煙も後へに靡き、清爽の氣身を襲ふ。殘月彼方の山の端に懸り、村里は靄の中に在りて覺めず、歩々光と暗と地歩を爭ふが如き、又微雨の蕭々たるに歷史ある古寺を訪へば、蝸牛壁に紋を畫きて、自ら多年風雨の侵蝕を示したる、若しくは夕陽に馬を下りて古英雄の廟を弔へば、何とも名狀すべからざる幽懷を生

桃源一村　武陵桃源は假想の理想郷。晉の陶淵明に「桃花源記」がある。

パノラマ　Panorama.

ずるが如き、これ皆旅行に非ずんば得べからざる底のものに非ずや。蕪村嘗て句あり。

羽蟻飛ぶや富士の裾野の小家より

一面の平湖鏡のごとき浮島ケ原、其の南を縫へる松林の東海道、總べて是一幅の畫圖なり。而して春天穩かにして「富士おろし」吹かず、空氣は漣波だも動かざる水に似たり。忽ち羽蟻の飛ぶあり、靜中纔かに動あり。駘蕩の春色寫し得て眞に迫る。此の如き春景、豈一室に坐して冥想する者の解し得る所ならんや。

旅行の妙趣は登臨を以て最も大なりとす。青竹を杖つきて五千尺以上の高山に上り、而して下界を見よ。數個の山脈は蛇の如く邑を圍み州を隔てて、營々たる人間恰も蟻垤の如く見ゆるのみならず、造化の大經濟も亦雙眸の外に漏れず、山河の配置自ら天命

蕪村　姓は谷口、一に與謝といふ。天明調代表の俳人。

浮島ケ原　靜岡縣駿東郡愛鷹山の裾野。

を示せり。乾坤大なりと雖も、悟了すれば浮動の原素に過ぎず。原子（アトム）と原子（アトム）と相擊ち相觸れ、紛糾錯綜したる混沌の狀態たるに過ぎず。劉は起りたり、項は亡びたり、シーザーは生れて死したり、帝國も覇圖も俯視すれば唯一氣のみ。東坡の所謂「山川與城郭、漠々同一形。市人與鴉鵲、浩々同一聲。」なるものは眞なり。故に山上に上るは一の哲學なり、高山の絶頂に坐するものは、卽ち哲學の講壇に坐するものなり。

人は永久無限を慕ふ者なり。人の此の世に於ける境界は有限なり。然れども彼は無限の中に姙まれたる者なるが故に、無限は其の欲望なり。雲雀よりも高き峠にやすらひて、身を雲の中の人となし、世界の彼方より此方に旅行する鳥の行方を眺むれば、無限の渴望を慰せらるゝことなきを得ず。白雲のたなびく山のあな

アトム　Atom.

劉は起り　漢の劉邦、沛より起つて天下を併はせ、楚の項羽、劉邦の爲に垓下に敗られた。

シーザー　羅馬の政治家。嘗て文武の大權を握つたが、後反對黨の刺殺する所となつた。

東坡　宋代の文豪。名は軾。此の詩は「眞興寺閣」と題するもの。

雲雀よりも雲雀より上にやすらふ峠かな（芭蕉）

山のあなたみ吉野の山のあなたに宿もがな身のうき時のかくれがにせん（藤原宗長）

たにも國あり、遙かなる嶺の外にも鳥の住むべき里あり。

天つ雲ひとつに見ゆる越の海の
涙をわけてもかへるかりがね

天つ雲　源三位頼政の歌。

天青くして雨は雁の背より霽れたり。自然の家には住むべき舍多きかな。人間豈塵界の爲に繩せらるべけんや。此の意義に於て、自然は人をして無限ならしむるものなり。これ旅行より學び得たる自然の教訓にあらずや。（愛山文集）

荻原井泉水　名は藤吉。東京の人。俳人。

四　芭蕉の生活とその俳句

荻原井泉水

芭蕉の俳句を見ると、その生活がそつくり其儘出てゐるものが多い。即ち俳句といふ彼の藝術が、彼の自然禮讃の生活とぴつたり合致して隙がない。これは俳句といふものの上で、いや日本の

芭蕉　松尾氏。名は宗房。伊賀の人。正風の祖。元祿七年（一六九四）大阪に歿、年五十一。

詩といふものの上で、芭蕉によつて發見された尊い眞理である。芭蕉以前の俳句は、一つの作爲、もしくは機智であつて、面白さうな事を考へ、面白さうに言ひこなせばよいとされてゐた。作者自身の生活から句作するなどといふことは、思ひもよらなかつたのである。さうした際に、俳句は、詩は、作者の實感から出發せねばならぬ、作者の生活から產み出されねばならぬ、といふことを實證した

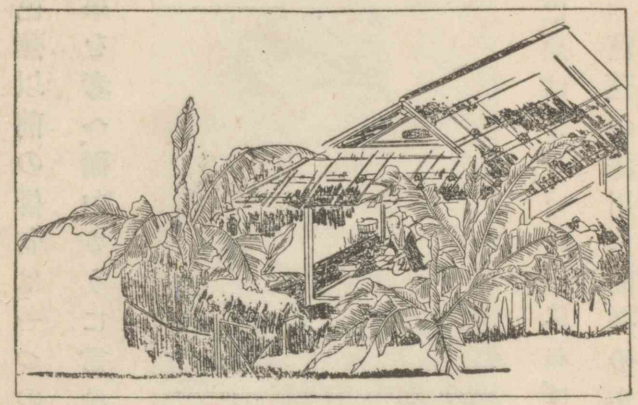
松尾芭蕉

芭蕉は、えらいと謂はねばならぬ。

芭蕉が深川六間堀の小さな草庵に隱栖して、獨り心の中に新しい詩の芽を育んでゐた頃の作、

深川六間堀　今の東京市深川區六間堀町。

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな



芭蕉庵

庭には數株の芭蕉が植ゑてあつたので、「芭蕉庵」と稱し、「芭蕉」といふ名もこれから得たといふその草庵は、屋根も傷んで野分の雨が洩るので、盥を出して雨うけしてゐる佗しい有樣が、目に浮んで來る。秋風がすさまじい勢を以て軒先に迫つて來る、一たまりもなく破れてしまふ芭蕉の傷み易い葉の揉まれる音、ばらばらと散彈を擊つやうな大粒の雨、その雨が、じや〳〵と盥に落ちる音も聞えるやうだ。部屋の中にぢ

つと耳をすまして大地の音を聽いてゐるやうな作者の、淋しい、澄んだ、わびしい心持を中心として、秋の淋しい自然が、この俳句に生きてゐる。

芭蕉庵の近くには、彼の門弟の曾良が住んでゐて、朝夕薪水の勞を扶けてゐた。或日雪の降る中に、いつもの如く曾良は芭蕉を訪ねて來た。懶い芭蕉は爐に火の消えたのも其儘にしてゐた。

君火をたけよきもの見せん雪まろげ

「雪まろげ」は雪を丸めて何かの形に造つたものである。二人の親しさ、それは子供のやうな純な感情が、この句に泌み出てゐる。

曾良の外にも、芭蕉の門人達は、をり〳〵訪ねて來ては庵を賑はした。しかし、芭蕉は夜も更けて、獨り自分の影法師より外に人の形のない部屋に、ものを考へてゐる時などは、流石に淋しかつた。

曾良　河合氏。信濃の人。芭蕉の門人。

其角　榎本氏。江戸の人。芭蕉の門人。

四谷　江戸の四谷。今の東京市四谷區。

酒のめばいとゞ寝られぬ夜の雪

芭蕉の人間的な感情がよく出てゐる。門人其角が餘り大酒をするので、その健康を氣遣つた餘り、「飲酒一枚起請」の文を寫し、

朝がほに我は飯くふ男かな

の句を添へて、其角の許に送つた事もあつた。大酒をする人として、世の中が淋しいから盃を手にするのであらう。併し芭蕉は靜かに醒めて、その淋しさをぢつと見据ゑてゐる人であつた。世の人人が生きる爲にと競ひ立つて、あわたゞしく馳せ競べするやうに一生を過すのとは違つて、「時」といふものが人生を浮べて、悠久から悠久に流れてゆく姿を、ぢつと見すゑてゐる人であつた。

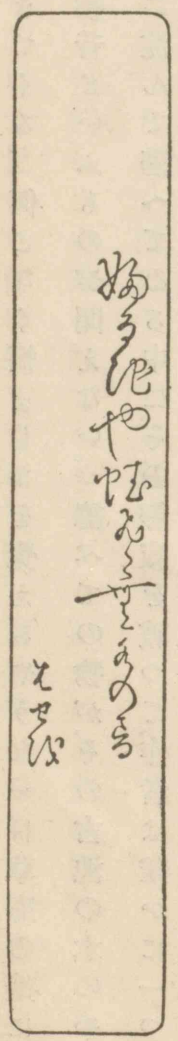
暮れ遲き四谷すぎけり紙草履

さうした靜觀の眼は、殊に自然の風物に向けられた。多くの人が無感興に見て過ぎてしまふやうな路傍の雜草でも、それを凝視してゐれば、その中に自然の大きな生命が全體的に輝いてゐることを彼は知つた。

筆讀　ふる池や蛙飛こむ水の音　はせを

よく見れば薺花さく垣根かな

作者のやはらかい感情が、「おゝ此處に」とかよわい薺を抱きかゝへるやうである。そして可憐な薺の鄙びた姿が、芭蕉に微笑みかけてゐるやうである。これは薺を歌つた句だが、それがそのまゝ芭蕉自身の生活を歌つた事になつてゐる。



芭蕉の名を知る者は誰も知つてゐるほど人の口に傳へられて

ゐる古池の句、この句でも芭蕉の生活を背景にしてその味ひが生きてくる。何となく惱ましさを覺えるやうな一日、草庵の邊には物音といふものが聞えない。總べての物が、その古池の水のやうに淀んで湛へてゐる中に、その靜寂を破つて、作者は確かに一つの音を聞いた。それは蛙が水に飛込んだといふ些細な地上の一事實だが、この一つの音にも汎有的な生命のぬきさしならぬ自然味を感じたのである。地上の總べての物に悉く神の意志が現れてゐる不思議さを、芭蕉は證悟したのである。

リズム
Rhythm.

此の句は作者の生活を背景にして見ると、實にはつきりと出てゐる。然し其の作者を知らぬものには解らないとか、若しくはつまらなく感ぜられるといふのではない。たとへば芭蕉がどんな人だかを知らなくとも、此の句のリズムをよく味へば、やはり作者

の氣持が出て來る。――「古池や」と先づ古池にぢつと眺め入る靜觀の感じを出し、一轉化して「蛙とび込む」と生命の跳動を點出し、それが「水の音」に歸結して、ただ〳〵水の音の寂しさに沒入した感じを出した言葉の端的にして尖鋭に、それで全體的に完結してゐる調子から、作者の心持――或大自然の暗示に觸れたやうな一刹那の緊張した心持、その心持を愛惜して、自然の懷につゝましく生きてゐようとする作者の禮讃的な生活――が出てゐるといふべきなのである。

名月や門にさしくる潮がしら

この「門」は人の家の門ともこれようが、やはり芭蕉庵のさゝやかな門口と見なければ生きて來ない。芭蕉庵は深川の小名木川の邊にあつたので、滿潮の時は草庵近く水があげて來たのである。

「名月や」といふ詠歎的な言葉は、月の高い無邊際の天空に目を放ちやつた氣持で、その氣持が、廣々とした潮のゆらめきにとけきつて、又ひた〳〵と自分の胸に歸つてくる感情の波動が、「門にさしくる潮がしら」と結んだ短い言葉のリズムに表現されてゐる。この句に描かれてゐるものは、月夜の佳景ではない、月に清められてゐる作者の清々しい生活そのものである。

上に「芭蕉の生活」といつたが、この言葉は內面的の生活、卽ち心の生活といふ意味である。芭蕉は、「佳い生活」、卽ち心の平和な、感謝に充ちた生活をしようと考へた人である。外面的に、物質的に佳い生活をしようと思つたのではない。かやうな物質的生活に對しては、彼は全く意欲を棄ててゐた。自ら金を得ようとせず、たゞ弟子たちの報謝するところに依つて、貧しく生きてゐられゝば結構だとした。深川の庵室も一門人から提供してもらつたのであるし、日々の米や鹽も門人の喜捨に任してあつたのである。芭蕉はさうしてこそ、人は本當に自然の愛を感じ、また人間の愛を感じて生きることが出來ると思つた。生存競爭といふ咥み合ひもなく、常に合掌してゐるやうな有難い心持で生きてゐられると思つた。さうしてこの愛と感謝とに充ちた一念が、物に觸れて表現される所に、彼の詩、卽ち彼の俳句が生まれたのである。

陽炎の我が肩にたつ紙衣かな

自分といふものを自然の光明の中に置いて、その光明をしみじみと暖く心の中に感受してゐる心持が生きてゐるではないか。かやうな專念的な、中核的な心持を表現するには、極めて單純な、原始的な、簡素な、而も凝聚的な强い響を持つた言葉でなければなら

ない。そこに芭蕉は「俳句」といふ十七字の詩形を見出したのである。また俳句といふ藝術が、かやうな生活の心境を歌ふ爲に二つなきものであつたのである。芭蕉の生活とその俳句とは、ぴつたりとして一であつて、その間に少しの隙もないのである。（古人を說く）

月日は　天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客。（李白、春夜宴ニ桃李園ニ序）

去年　元祿元年。

白河の關　福島縣白河郡古關村大字旗宿にある。奧州の關門。

五　奧の細道

松尾芭蕉

一　首途

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を泛べ、馬の口捉へて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲處とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白

杉風　鯉屋藤左衞門。翁の門人。別墅は江戸深川六間堀にあつた。

千住　東京市足立區。東京の東北口。

河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取る物手につかず。股引の破れを綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅に移る。

草の戸も住み替る代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の嶺かすかに見えて、上野・谷中の花の梢またいつかはと心細し。

首途

睦じき限は宵より集ひて、船に乘りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゝぐ。

元祿二年
時に芭蕉四十六歳。

吳天に白髮
去年九月到二東洛一。今年九月來二吳鄉一。兩邊蓬鬢一時白。三處菊花同色黃。（白樂天）

草加（そうか）
埼玉縣（武藏）北足立郡。奥州街道にあたる。

行く春や鳥啼き魚の眼は涙

これを矢立の始として行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚たゞ假初に思ひ立ちて、吳天に白髮の恨を重ぬと雖も、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと、定めなき賴の末をかけ、其の日漸く草加といふ宿に辿り着きにけり。痩骨の肩に懸れるもの先づ苦しむ。たゞ身すがらにと出で立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣・雨具・墨・筆の類、あるはさり難き餞などしたるは流石に打捨て難くて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

二　白河の關

心もとなき日數重るまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。

いかで都へ
たよりあらばいかで都へつげやらん今日白河の關は越えぬと（平兼盛）

三關
念珠（鼠關・白河關・勿來關）を東國の三關といふ。

秋風を
能因法師の「都をばいかで都へと便求めしも理なり。中にも此の關は三關の一にして、風騷の人、心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな　曾良

三　松島

抑事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島島の數を盡して、欹つものは天を指し、伏するものは波に匍匐ふ。或は二重にかさなり三重に疊みて、左に別れ、右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃やかに、枝葉汐風に

かゝ

いかで
たよりあらばいかで都へつげやらん今日白河の關は越えぬと（平兼盛）

三關
念珠（鼠關・白河關・勿來關）を東國の三關といふ。

秋風を
能因法師の「都をばいかで都へと便求めしも理なり。中にも此の關は三關の一にして、風騷の人、心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな　曾良

三　松島

抑事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島島の數を盡して、欹つものは天を指し、伏するものは波に匍匐ふ。或は二重にかさなり三重に疊みて、左に別れ、右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃やかに、枝葉汐風に

古人
竹田大夫國行。

清輔
藤原清輔。二條天皇の御代の歌人。（その著「袋草紙」の記事を指す。）

扶桑
日本國の異稱。

洞庭
支那湖南省の北にある大湖。

西湖
支那浙江省にある湖。

浙江
支那浙江省東北部の灣。一名錢塘江。海潮の奇を以て知られる。

大山祇（おゝやまつみ）　山を司る神。

雲居　京都妙心寺の名僧。仙臺侯政宗迎へて松島瑞巖寺に居らせた。

平泉　岩手縣西盤井郡平泉村。

石の卷　宮城縣牡鹿郡。

吹き撓められて、屈曲自ら撓めたるが如し。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工いづれの人か筆を揮ひ詞を盡さん。

雄島が磯は地續きて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、座禪石などあり。松の木陰に世を厭ふ人も稀々見え侍りて、落穗松笠など打煙りたる草の庵閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懷かしく、立ちよる程に、月海に映りて晝の眺また改む。江上に歸りて宿を求むれば、窓をひらき、二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

四　平泉

十二日、平泉と志し、姉齒の松、緒絶の橋など聞き傳へて、人跡稀に、雉兎・蒭蕘の往きかふ道そこともわかず。終に道ふみ違へて、石の

—金色堂—

黄金花咲く　すめろぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山にこがね花さく（大伴家持）

金華山　宮城縣牡鹿半島の極端、海中に屹立する島。

袖の渡　石の巻の北、北上川の渡し。

尾ぶちの牧　石の巻の對岸。

長沼　宮城縣登米郡新田村。

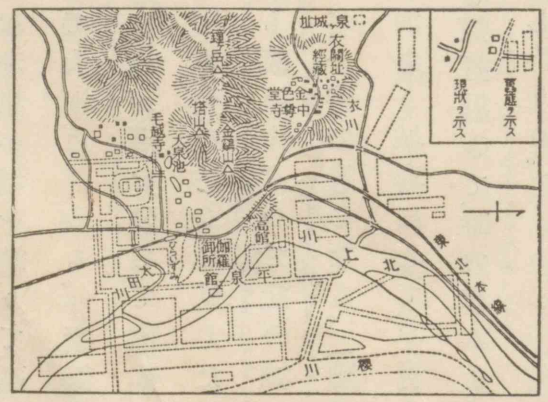
戸伊摩　同郡登米町。

三代　藤原清衡・基衡・秀衡。

秀衡が跡　平泉館址。

巻といふ湊に出づ。「黄金花咲く」と詠みて奉りたる金華山海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を爭ひて竈の煙立ち續けたり。思ひかけずかゝる處にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸くまごしき小家に一夜を明かして、明くれば又知らぬ道迷ひゆく。袖の渡、尾ぶちの牧、まのゝ萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に到る。その間二十餘里ほどと覺ゆ。

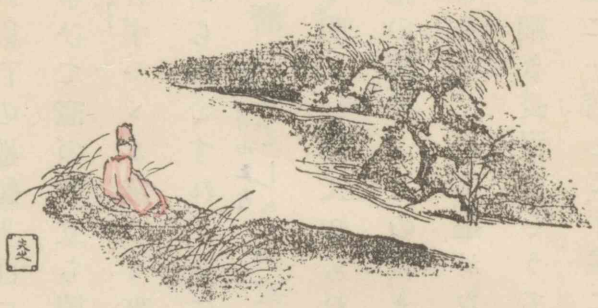
三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡



平泉變遷圖

金雞山　秀衡の作つた平泉鎭護の山。富士山に擬し雌雄の金雞を山上に埋めたといふ。
高館　衣川館。義經の居館。
和泉　泉三郎忠衡。秀衡の三男。
泰衡　秀衡の次男。頼朝に滅された。
國破れて　國破山河在。城春草木深。（杜甫、春望）

が跡は田野になりて、金雞山のみ形を殘す。先づ高館に上れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城を繞りて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。



夏草や（交山筆）

さても義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と笠打敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

經堂　藤原清衡建立、建武四年修理した。
光堂　金色堂、藤原清衡建立。覆堂は惟康將軍の建立。
三尊　阿彌陀如來・觀世音菩薩・勢至菩薩。
七寶　金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・眞珠・琥珀。
象潟　秋田縣（羽後）由利郡。其の後文化元年鳥海山の噴火によつて埋沒した。
酒田　鳥海山の西北麓。
鳥海山　秋田縣（羽後）飽海郡にある活火山。

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新に圍んで、甍を覆うて風雨を凌ぐ。姑く千歲の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂

五　象潟

江山水陸の風光、數を盡くして今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え磯を傳ひ、砂を踏みて其の際十里、日影やゝ傾く頃、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隱る。闇中に摸索して、雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色亦たのもしと、蜑の苫屋に膝を容れて雨の霽るゝを待つ。其の朝天よく晴れて朝日花

花の上漕ぐ　きさかたの櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり舟　（西行法師）

むや〳〵の關　有耶無耶關。陸前羽前兩國の境にある笹谷峠にあつた關。

やかにさし出づる程に、象潟に船を浮ぶ。

先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、向うの岸に舟を上れば、「花の上漕ぐ」と詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ。寺を干滿珠寺といふ。此處に行幸ありし事いまだ聞かず、いかなる事にや。

象潟古圖

此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其の影映りて江にあり。西はむや〳〵の關、路を限り、東に堤を築きて秋田に通ふ道遙かに、海、北に構へて浪打入るゝ處を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、俤松島に通ひて又異なり。

西施　支那周代の人。吳王の寵姫。

横山健堂　名は達三。山口縣の人。評論家。

象潟や雨に西施がねぶの花　（奥の細道）

六　杜鵑啼くころ

横山健堂

杜鵑啼く新緑のころ、都門を西に去る一千哩、故郷近き海岸の町に淹留すれば、大柄の浴衣地にしんしを張りたらんやうに、眞直に美しく伸びたる長き町に沿ひて、限なくひろがりゆく萬頃の碧波、舞臺の背景よりも麗しき、參差としたる綠の山々、谷々。帆影と鵑聲と、客愁を動かし易し。

客中、更に客となりて、筆を載せ、舌を載せて、山に登り、海を渡り、一年の好時節、何事ぞ一日の閑なるを得ず。溪流に漱げば、落紅、吾が掌に濺ぎ、甲板に微吟すれば、島の柳條、吾が帽を掠めて搖ぐ。樹下、石上、悉く詩あらざるは無く、薰風、吾が懷を暢ぶ。到るところ、新綠、吾が眼を染めて、正に杜鵑の舞臺なるかな。

此の夕、偶客舍に閑居して机に對ひつゝあれば、朝來の雨、漸く大地を浸潤し、夜に入つてしめやかに地に觸るゝ雨の音、吾が旅魂を誘うて、のどかなる閑愁を味はしむ。

殘りの微光を溶かしたる黃昏の雨に、東窓を開けば、裏の小路を隔てゝ、大なる庭の夏橙、寶玉のやうに浮びて見えし。日落ちて窓を閉せば、一室に籠りて、吾が心頭の乾坤、却つて擴がりゆくを覺ゆ。

雨の音の歇みし間を、思ひ出したるやうに蛙の鳴くが、始めて聞ゆ。町に迫りて西南に近く斗出したる岡の森の梟が、宵より續けて、雨の夜の司會者らしく鳴く。雨の音、斷えて、また續き、殘燈、熒々として吾が筆を照らしつゝ、床の間の高き芍藥花に、夜は獨り靜かに更け行く。

竹藪の筍は伸びて竹となりて、廣庭の涼しき山寺の緣に腰掛けて在れば、閑却されたる名所を發見したる心地す。

「晝寢す可らず」と書かれたる寺の緣の、俗にして涼しからず。晝寢せざるる寺の涼しきは嬉し。晝寢せずとも可し。獨り山寺の緣に來て、新綠を眺めつゝあれば、悠々たる天地、自ら吾が有に歸せずんばあらず。

遠く、近く、群がり漲る新綠が、吾が一身を包むを觀つゝあれば、寺

晝寢すべからず
晝寢すべからずとある寺の緣涼し
（大谷繞石）

の緣は舟にて、吾が身は大海原に浮べるなり。新綠は水の如しといふよりも、海は新綠の如し。限なき碧波を地上に飜して、凝つて崩れざるものは、新綠の氣分にあらずや。

風吹けば新綠の波立つこと、此の頃の碧海の如し。風無きも、新綠は自ら流動の勢を帶ぶ。流水を溯るとき、新綠を穿つて行くに異ならず。

水を畫くは新綠を畫くがごとく、新綠を畫くは水を畫くがごとくならずんばあらず。草木黃落して根幹を露はせば、溪流に水落ち石出づるなり。

新綠の涼味は水の涼味なり。水は新を意味す。水、生動せざれば新しからず、綠、新しきときに涼味湧く。

新綠は早曉に宜しく、薄暮に宜し。新綠の妙味は盛日よりも微

星稀に月白く月明星稀、烏鵲南ニ飛。（魏曹操、短歌行）

光にあり。その最も微妙の佳境は、眞に暫時の中に在り。譬へば醱酵の妙處の刹那の如く、醉心地の好適の瞬間の如くなるべし。

新綠は水より出でて水に入る。未明に見る新綠の森の海の如くなるが、曉光に伴うて新綠、漸く流れ出づ。殘陽より見て薄暮に至れば、畫くが如き新綠、留めんとして得べからず。暮光、おぼろなる刹那、新綠の森は、破墨を以て畫ける山水の趣味あり。此の境、僅かに一轉過すれば、星稀に、月白く、新綠は蒼然として海を望むが如し。

吾輩一日、暮色に、新綠に對して米點山水を思ふ。夕陽に新綠の畫趣の移り行くを見れば、畫法を悟るを得べし。

日暮れ、綠の闇を穿ち、山寺を出で、溪聲に沿ひて下り行く。綠樹の缺けて空明かなるところ回看して山を望む。二山、左右より迫

つて、嶺の低きところ、星數點、僅かに山を出づるの月。此の時、月、頗る人間に近きを思ふ。杜鵑一聲、月を掠めて飛ぶべき理想境なり。夕陽、消えなんとして、僅かに海面に粘着して殘るとき、燕魚高く波を出で飛ぶ。杜鵑は地上の燕魚なり。燕魚の飛ぶは、杜鵑が新綠の海を啼き過ぐる詩境ならずんばあらざるべし。（現代隨筆大觀）

横井也有

俳人。名古屋藩士。天明三年（一七八三）歿。年八十二。

籠に苦しむ　もしながば蝶々籠の苦をうけん（西山宗因）

莊周が夢　莊周、夢爲ニ胡蝶ト、栩々然胡蝶也。（莊子）

古今の序　花に鳴く鶯水に住む蛙の聲を聞けば生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。

七　百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものゝ限なるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこのものには託しけめ。

蛙は「古今の序」に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池にとんで

筆蹟　ひろがほやどちらの露もまにあはず　右磯清水を以書　羅隱

やがて死ぬ　やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲（芭蕉）

貧の學者　晉の車胤の故事。

横井也有とそ筆蹟

翁の目覺ましたれば、このものゝこと更にも謗りがたし。蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日さかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞るここちす。されば、初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず。このものばかり初蟬といはるゝこそ大きなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものゝ上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢はたぐふべきものもなく景物の最上なるべし。水にとびかひ草にすだく。五月の闇は只このものゝ爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者に捕へられて、

蓼食ふ蟲
蓼食ふ蟲もすきずき。（俚諺）

槐安の都
淳于棼、醉夢入レ大槐安國一。見レ王。王曰、吾南柯郡屈レ卿爲レ守。凡二十載。使者送出レ穴。遂寤。尋ニ古槐下蟻穴一。乃槐安國。又一穴直上南枝。即南柯郡也。（異聞集）

油火のかはりにせられたるは、このものゝ本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならん。つくゝぼふしといふ蟬は、つくしこひしともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。」と世の諺にいへりけり。哀れは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すや。蜉蝣ははかなき例に引かれ、蓼食ふ蟲は物好の謗となれり。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黃金蟲は賤し。

蟻は明暮に忙しく世の營みに隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都を逃れてその身の安きこ

千丈の堤
千丈ノ隄以ニ螻蟻之穴一潰。（韓非子）

原
靜岡縣駿東郡原町。

吉原
同縣富士郡吉原町。

とを得ん。さるも便あしき方に穴をあけて千丈の堤を崩すべからず。

蟷螂の痩せたるも、斧をもちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕籠にのりて富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるをもて名によべり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし、人に疎まる。一在所に二人の八兵衞ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃端居珍しき夕べ、始めて

竹林の七賢　嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎。（晉書）

賀川豐彦　兵庫縣の人。宗教家。文藝家。

ファウスト　獨逸の文豪ゲーテ作の戲曲 Faust の主人公。

ほのかに聞きたらん、又は長月のころ力なく殘りたるは、淋しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊遣焚く里の煙など、且は風雅の道具ともなれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。（鶉衣）

八　青年の志氣

賀川豐彦

陸地は海洋の總面積の五分の一にも足りない。陸地の總てを占領しても、地球の總面積の六分の一にも及ばない。大きな世界を望む新日本の青年に、地球の六分の一はあまり狹すぎる。年寄は兎に角、日本の若き男女は、海洋に躍り出でよ。ファウストは、海に畑を作ることを夢想した。然し私は、海に牧場を設くることを夢見てゐる。太平洋に鯨を飼ひ、海豹を大西洋に養へば、世界の人口が百億萬人になつても、食糧に窮することはないであらう。

海洋を征服せよ、海洋を。黑潮に國境はなく、怒濤に民族性はない。大和男子は、海から生れて、海に死ぬべき覺悟を持たねばならぬ。

たとひ海に往かなくとも、山腹を開き、高原を開拓し、寒氣に屈せず、暑熱を厭はず、民族の繁榮を希ふものは、青年を措いて、他に求むべきではない。日本の國土は決して狹くはない。これをイギリスに較べても、ドイツに比しても、總面積と人口との比例は狹いといふことは出來ない。たゞ、日本は山が廣いのだ。總面積の八割五分は山が占めてゐる。山から流れ出づる河川の兩側に、河口の三角洲に、米ばかりを作つてゐた日本民族は、立體農業の貴さを知らず、山と高原とが、生命の樹の實を人類に供給することを忘れて

しまつた。もし、日本の青年が、栗・胡桃・どんぐり・椎等の立體農業に目醒めて、山岳農業を營むことを知れば、日本は今の三倍の人口になつても、食物に窮することはないであらう。しかし山を恐れるものには、生命の樹の實はその姿を隱す。青年よ、山を征服せよ。

滿蒙の天地は、日本男子を待つこと茲に三十年。しかし、鴨綠江を越えて、韓人の移住するもの百萬人を數へ、渤海灣を横切つて、山東の苦力（クリー）の移住するもの數百萬を超えたが、日本人は僅か十七萬を數へるのみであつた。二十五萬の生靈を犧牲にして、滿蒙の地を守つたその血に對して、日本民族は、何の成果を結ばせたか。攻むることに勇しくして、守ることの拙きは日本の青年である。腹帶を締めて、盤石の如く勇猛なれ、日本の若人よ。先驅者に對して志氣の劣れるを自ら恥ぢよ。

七德の天使　キリスト教の七人の天使長。アブデイエル・ガブリエル・ミカエル・ラギウエル・ラファエル・シミエル・ウリエル。

樺太に三十萬、臺灣に十六萬、朝鮮に四十萬、ハワイに十二萬、日本民族の海外發展が、如何に遲々たるかは、この數によつて解る。問題は、青年の志氣に存する。

四百年前、文藝復興の波が、イタリアの自由都市ヴェニスを訪れた時、輕薄なる風潮は、ヴェニス市民の魂をむしばみ、文典式科學は、彼等を自腐させ、僅かばかりの繁榮に情慾の帆綱を引締めることを忘れた市民は、世界の窮乏を前にして、私利私慾に總てを任せた。そしてこれがヴェニス自由國の滅亡の原因となつた。藝術はそこに廢頽し、志氣は枯れ、海潮に守られた花の都も、死の都と化してしまつた。地中海に雄飛した商船は、いつしか姿を消し、榮華を誇つた貴族等は、棺桶の蓋に七德の天使を彫刻して、僞善の模範を後世に遺した。青年の萎縮した民族の前途は、いつもこの通りであ

る。道德的思想を蹂躙する民族に、曾て永久の繁榮のあつたことはない。

ナポレオンの蹂躙に憤激した哲人フィヒテは、ドイツの青年に告げて、志氣の漲る處に國土の回復を期し得べきことを豫言した。民族の興隆は、全く青年の志氣に依存する。

生命の泉は、これを自ら濁すものに復讎する。これを堰く者には逆倒の奔流となり、その流を阻む者には狂亂せる迸りとなる。そしてその生命の清水の活栓を握るものは青年である。日蓮は三十二歳にして大覺の道に進み、マルチン、ルーテルは二十四歳にして悟道の域に入つた。キリストの公生涯は三十歳に始められ、釋迦は二十九歳にして出家の道に入つたといはれる。世界の聖人は、概ね青年時代にその志を立てた。國を亡すも青年であり、國

フィヒテ　獨逸の大哲學者。（西暦一七六二―一八一四）

マルチン、ルーテル　獨逸の宗教改革首唱者。（西暦一四八三―一五四六）

を興すも青年である。青年の意氣衰へて國亡び、青年の意氣旺にして國興る。松下村塾の青年等は日本を維新し、カブールの下に集つた青年は、イタリアを改造した。青年は花だ。その蕾のうちに自ら守らなければ、人類の運命を奈落の底に陷れる。無窮の理想に鼓吹せられて立ち、神と永遠の言葉を物質の上に刻まれた表象の世界に讀むのでなければ、世界の青年の生れ出でた理由を、私は疑ふ。

日本の青年よ、日の丸の旗の如く明るくあれ。みづからを光源として太陽の如く輝け。その日に、榮光は君等に歸つて來るであらう。太陽の面上にも光の暴風はあるだらう。その球面上に黑點の影するときもあるだらう。しかし私は、日本のために、青年が永遠の光源であることを祈つて止まない。東洋の憂鬱は加はり、

カブール　伯爵。伊太利の政治家。（西暦一八一〇―一八六一）

暗黑の翼が生靈の上に影することがあつても、黑潮の子等は、總ての暗黑を蹴破つて、東天を昇る朝日の如く輝かねばならない。こに日本青年の使命が存する。

九　石彫獅子の賦

薄田泣菫

薄田泣菫　名は淳介。岡山縣の人。詩人。隨筆家。大阪毎日新聞社員。

1

童子に問へば石工は　木かげの夢に耽りぬと。
入りて小暗き仕事場に、　刻みさしつる唐獅子の
圓き頸をかきなでて、　誰ぞ、もの思ふは、ひそやかに。
朽木の棚にすゑられて、　顏くすぼれるあら彫の

豕・狗兒・野の狐、　さては雄鹿のむらがりに、
こはめざましき誇かな、　日かげにぬるゝ獅子の影。
裂けつる岩に爪かけて、　雄々し憤るかその姿、
鬣長く背に卷きて、　見れば湧きよる春の潮。
胸はゆたかに力男が　曳きしぼりたる弓の如。

忿怒現ずる明王の　廣き肩より燃えあがる
焰か、長き尾は躍り、　にこ毛密なる蹠は、
いざよひ薔薇の花踏むも　巢くへる鳥はめざめまじ。

心がまへのいみじさや、　瞳子彫られぬ唐獅子は、

光を知らぬ盲目の身、　鼻かぐはしき香を嗅ぐも、
いまだ前脚ふみあげて、　花野の路はしだかじな。

鑿の手またく捨てられて、　御苑の夏のあけぼのや、
緑したゝる木のかげに　巨人の如く立たん時、
雄姿如何に、背に伏して　暫し想像に耽らまし。

2

汝の王者かたどられ、　眞白き石に刻まれぬ。
野より、山より、林より、　つどへよ獸、列なりて
蹄の前にひざまづき、　弱きを恥ぢて僕たれ。

偉き靈魂くだりきて、　眞白き石に包まれぬ。
野より、山より、林より、　つどへよ獸、列なりて
其の光輝にぬれぬべく　蹄の前にひれふせよ。

無上の權威あらはれて、　眞白き石に具せられぬ。
野より、山より、林より、　つどへよ獸、列なりて
王にさゝぐる燔祭の　聖き火盤を整へよ。

斑の牛と羚羊は、　深き痛手に甘んじて、
焰の中に身を投げよ。　誇るべきかな犧牲の
高きほまれは汝にあり　羨む群ぞ愚かなる。

見よ犧牲はそなはりぬ、　獅子は額にたて髪の
長き流れをふるはせて、　あな起ちあがる、「戰鬪と
勝と力の權化なり、　伏せよ」と呼べば皆伏しぬ。

盛なるかな、その言葉、　「神は死ぬめり永久に、
人は魔のごと强からず、　われは王者ぞ、萬有の
値の源ぞ、煩ひと　悶えの胸の主人なり。

あゝ運命の眩きをも、　眼ひらきてながめ入り、
胸わなゝかぬ雄心の　若き勇氣に溢れたる、
勝利のおもひに漲れる　この身この世に何の死ぞ。

絶ゆることなき永遠よ、　われは汝の伴なり」と、
聲は喇叭の音に似たり。　時に默止は破られて、
高き讃美と服從は、　雷のごとよみに現はれぬ。

3

いま想像の羽撓む。　見れば唐獅子日を浴びて、
ふくよかにまた靜かなる　姿いかなる誇ぞや。

石彫長く傳はりて、　榮とならんは幾千歲、
あゝ藝術は支配せよ、　とはの生命ぞ汝にあり。

（泣菫詩抄）

瀧澤馬琴　名は解、曲亭馬琴と號した。德川末期の小說家。嘉永元年(一八四八)歿、年八十二。

禍福云々　禍之與レ福兮何異ニ(ソレ)糾纆ニ(ジョウボク)(漢書賈誼傳)

塞翁が馬　淮南子に見える故事。熙曝機の詩の句に「人間萬事塞翁(ガ)馬。」

禍の倚る所　禍兮福所レ伏(スル)、福兮(ハ)禍所レ伏(スル)、孰知ニ(カンソ)其極ヲ。(老子)

滸我　足利成氏の居城。茨城縣(下總)猿島郡、今の古河町。

芳流閣　滸我城中の三層樓。

一〇　「芳流閣」とその批評

瀧澤馬琴
大町桂月

古の人謂はずや、「禍福は糾へる繩の如し。」と。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。こは福の倚る所、はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり、こは思へども豫てより、誰かよくその極を知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言記念の名刀、心にしめつ身につけつ、艱苦の中に年を經て、得難き時を得てければ、遙々滸我へ齎して、名を揚げ家を興すべかりつる、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の、刀は故の物ならで、我が身を劈く讐となる、憾みをこゝに釋く由もなく、事急にして意外に出づ。僅かに當座の辱を避けなんと思ふばかりに、許多の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に、攀登れどもと

瀧澤馬琴

にかくに、脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を極めたる、心の中は如何ならん、思ひ遣るだにいと痛ましし。

信乃は折角村雨の名刀を獻ずるの機を得て、福を得んとせしに、一二日前、すりかへられしことを知らざりしかば、忽ち身を殺されんとするの禍を釀すに至れり。「その福は禍と、ふりかはりたる村雨」の二三句、例の懸詞ながら、前節を承けて、妙言ふべからず。

されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舍に繫がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀。「犬塚信乃を搦めよ」とて、懲に擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられん事、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き、彼の樓閣は三層なり。

信乃は福が禍となり、見八は禍が福となる。冒頭の一節、是に於て益〻

切なり。月來の二三句妙甚だし。馬琴の懸詞には無理なるもの、下らぬもの多けれども、「君命重くいや高き」の懸詞は、覺えず讀者をして聳動せしむ。

八犬傳表紙

その二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の餘熱をわたる。敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟かぢを絶え、進退既に谷りし敵にしあれば、いかでわれ繫ぎとめんと、鼯の樹傳ふ如くさら〳〵と、登りはてたる三層の、屋

阪東太郎　利根川。

成氏朝臣　古河公方足利成氏。
横堀史在村　成氏の老臣。

根には、まぶしさすよしもなく、かたみに隙を窺ひつゝ、にらまへ合うて立つたる有樣、浮圖の上なる鶴の巣を巨蛇の狙ふに似たりけり。

名だたる阪東太郎の河畔、三層樓の屋上に、勇士と勇士と相闘はんとす。その雄壯なる事、歴史にも、小説にも、幾んど比を見ず。而して椽大の筆、よく此の雄壯なるさまを記し得る小説家は、明治以前、馬琴を措いて、また誰れにか求むべき。聞くならく、馬琴、八犬傳を逐次世に公にし來りしに、この芳流閣の搭闘出づるに及びて、忽ち非常なる喝采を博し、世にもてはやさるゝに至れりと。阪東太郎は伏線その一なり。

廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨・若黨圍繞せる床几に尻を打掛けて、勝負如何にと見上げたり。芳流閣の東西には腹卷したる許多の士卒、槍・長刀をきらめかし、或は箭を負ひ弓杖突つ立て、

——芳流閣上の格闘（一勇齊國芳筆）——

墨氏・魯般
墨氏は墨翟、支那周代の思想家。魯般は同時の公輸般をいふ。般が楚の謀臣となり、雲梯を造つて宋城を攻めた時、翟は宋城を守り、飛鳶を造つて之を防いだ。

組んで落ちなば撃ちとめんとて、項を反してこれを觀る。しかのみならず外面は、連綿として杳かなる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け力衰へず、能く見八に捷ち得とも、墨氏が飛鳶を借らざれは、虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも網に入りぬ、獣ならずも狩場にあり。三寸息絶ゆれば、縡みな休まん、脱れ果てじと見えたりけり。

二勇士を對峙せしめたるも、直ちにその格闘を描かず。忙裡閑をぬすんで、樓下の様をうつし、到底信乃の逃るべからざるを狀す。これ一層讀者を刺激する筆法なり。河水云々、伏線その二なり。

その時、信乃思ふやう、初層・二層の屋の上まで追ひのぼらんとせし兵等を、斫りおとしつる後は絶えて近づく者なきに、今唯ひとり

膳臣巴提便　欽明天皇の七年百濟に使し虎穴に入つて虎を刺殺した。

富田三郎　和田義盛の士。源實朝の面前で大鹿の角二箇を一度に折つたといふ。

登りきぬるは、よに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便が虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が鹿の角を裂く力あるか。遮莫一箇の敵なり、引組んで刺しちがへ死するに難きことやはある。よき敵ござんなれ、目に物見せん。」と血刀を袴の稜もて推し拭ひ、高瀨の如き方桴に立つたるまゝに寄するを俟つ。

既に信乃の身の危きことを、外部より觀察せり。こゝには更に信乃の心理を描出せり。而して外部の觀察とは違ひ、案外に、よき敵を得たりと喜べり。勇士の心中、讀者をして心自ら壯ならしむ。

見八も亦思ふやう、「かの犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて他の援を借ることあらば、獄舍の中より此の役儀に擇み出されしかひもなし。搦め捕るとも、擊たるとも、勝負を一時に決せんものを。」と思ひにければ、ちつとも擬議せず。

既に信乃の心中をうつせり。こゝにまた見八の心中をうつさざるを得ず。信乃も見八も、共にいさみにいさめり。共にこれ絶代の勇士。知らず、勝敗如何にか決すべき。愈〻これより搭闘はじまらんとす。筆路堂々として逼らず。手腕の大なる者と謂ふべし。

「御諚ざふ。」と呼びかけて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桙の左の方より進み登りて、組まんとすれど寄せ附けず。「心得たり。」と鋭き太刀風に、撃つをはつしと受留めて、拂へば透かさず切込む刀尖、さゝへて流す一上一下、辷る蔓を蹈みとめて、しきりに進む捕手の祕術、あなたも劣らぬ手練の働き、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主從・士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬きもせず氣を籠めて見る目もいとゞ遙かなり。

こゝに至りて、愈〻搭闘を記す。而して全く記し終らずして、之を見物する戍氏主從の上に及ぶ。縱横自在にして、痒き處に手のとゞく概あり。

さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音、掛聲。兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るもかくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなる、いと高き閣の棟にして、死を爭ひし爲體、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖、肱當のはづれを、裏かくまでに切裂かれしかど、太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場を計りて撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を、見八右手に受流して、返す拳につ

け入りつゝ、やつと掛けたる聲と共に、眉間を望みて、鐺と打つ、十手をちやうと受留むる、信乃が刃は鍔際より、折れて遙かに飛び失せつ。

搭鬪いよ〳〵佳境に及ぶ。事既に壯絶、筆勢また飛躍す。見八は捕手の役なれば、こゝに至るまでなほ刀を拔かず、信乃は百戰なほ餘勇、かなしや刀折れたり。記し來りて、殺氣紙面に迸り、讀者に冷汗をにぎらしむ。

見八得たりと無手と組むを、そがまゝ左手に引附けて、迭に利腕しかと取り、捩倒さんと曳聲合せて、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく蹈辷らして、河邊の方へころ〳〵と、身を輾ばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削り成したる甍の勢、止るべくもあらざめれど、迭に取つたる手を緩めず、幾十尋なる屋

の上より、末遙かなる河水の、底には入らで程もよし、水際に繫げる小舟の中へ、引累りつゝ揑と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張切つて、射る矢の如き早河の、直中へ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。（南總里見八犬傳）

刀失せて組打せしに、思ひきや、共に舟に落ちて川下に流れ去らんとは。前に二回まで伏線あり。舟におつること唐突ならず。勝負如何にと讀者をして固唾をのましめて、忽ち行方不明に歸す。餘韻盡きず。何等の狡獪手段ぞ。（近世名文解剖）

一一 戯作三昧

芥川龍之介

「これは初から書き直すより外はない。」馬琴は心の中でかう叫

芥川龍之介 東京市の人。文學者。昭和二年歿、年三十七。

弓張月
椿説弓張月といふ。爲朝を主人公とした歴史小説。馬琴の傑作の一。

南柯夢
三七全傳南柯夢といふ。傳奇小説。馬琴の傑作の一。

端溪
支那廣東省の地名。良質の硯石の産地。

蹲螭の文鎭
うづくまるみづちの形を摘みにつけた文鎭。

硯屏
文房具の一。硯の先に立てる屏風形のもの。

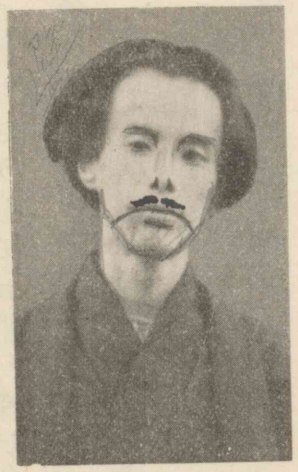
びながら、忌々しさうに原稿を向ふへ突きやると、片肘突いてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で「弓張月」を書き、「南柯夢」を書き、さうして今は「八犬傳」を書いた。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎭、蟇の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立——さういふ一切の文房具は、皆彼の創作の苦しみに、久しい以前から親しんでゐる。それ等のものを見るにつけても、彼は自ら今の失敗が、彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな——彼自身の實力が根本的に怪しいやうな、忌はしい不安を禁ずることができない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると、人並に自惚の一つだつたかも知

遼東の豕
漢書朱浮傳に「遼東有レ家、生レ子、白頭。異而獻レ之、行至河東。見群豕皆白、懐レ慙還。」

れない。」

かういふ不安は、彼の上に、何よりも堪へ難い落莫たる孤獨の情を齎した。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜であることを忘れるものではない。が、それだけにまた同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に、飽くまでも不遜である。その彼が結局、自分も彼等と同じ能力の所有者だつたといふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことを、どうして易々と認められよう。しかも彼の強大な「我」は「さとり」と「あきらめ」とに避難するには、餘りに情熱に溢れてゐる。


芥川龍之介

彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戰ひ續けた。若しこの時、彼の後の襖がけたゝましく開け放されなかつたら、さうして「お祖父樣、只今。」といふ聲と共に、柔かい小さな手が、彼の頭へ抱きつかなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、いつまでも鎖されてゐたことであらう。が、孫の太郎は襖をあけるや否や、子供のみがもつてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上つた。

「お祖父樣、只今。」

「おゝ、よく早く歸つて來たな。」この語と共に「八犬傳」の著者の皺だらけな顏には、別人のやうな悅びが輝いた。

茶の間の方では、甲高い妻のお百の聲や、內氣らしい嫁のお路の

栗梅　濃い栗色。

聲が賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、をりから仲の宗伯も歸り合はせたのらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましでもするやうに、わざと眞面目な顏をして天井を眺めた。外氣にさらされた頰が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが、息をするたびに動いてゐる。

「あのね、お祖父樣にね。」

栗梅の小さい紋附を着た太郎は、突然かういひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、靨が何度も消えたり出來たりする。——それが馬琴には、自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日？」

「御勉強なさい。」

馬琴はとう〳〵噴きだした。が、笑の中ですぐまた語をつぎながら、

「それから。」

「それから――えゝと――癇癪を起しちやいけませんつて。」

「おや〳〵、それつきりかい。」

「まだあるの。」

「どんなことが。」

「えゝと――お祖父様はね、今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりますから？」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつと〳〵よく辛抱なさいつて。」

「誰がそんなことを言つたのだい。」

「それはね。」太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。」

「さうさな。けふ御佛參に行つたのだから御寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、顎を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「淺草の觀音樣がさう言つたの。」

かういふと共に、この子供は家内中に聞えさうな聲で、嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛びのいた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに小さい手を叩きながら、ころげるやうにして、茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に、嚴肅な何物かが刹那に閃いたのはこの時である。彼の唇には幸福な微笑が浮かんだ。それと共に彼の目には、いつか涙が一杯になつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或はまた母が教へてやつたのか、それは彼の問ふところではない。この時、この孫の口から、かういふ語を聞いたのが、不思議なのである。

「觀音樣がさういつたのか。——勉强しろ。癇癪を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。

その夜の事である。馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は家内のものも、この書齋へはいつて來ない。ひつそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、こほろぎの聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

初め筆を下した時、彼の頭の中には、微かな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と筆が進むに隨つて、その光のやうなものは、次第に大きさを增してくる。經驗上その何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意して、筆を運んで行つた。神來の興は火と少しも變りがない。起すことを知らなければ、一度燃えても、す

ぐにまた消えてしまふ。

「あせるな。さうして出來るだけ深く考へろ。」

馬琴は動もすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分に囁いた。が、頭の中にはもうさつきの星を碎いたやうなものが、川よりも早く流れてゐる。さうしてそれが刻々に力を加へて來て、否應なしに彼を押遣つてしまふ。

彼の耳にはいつかこほろぎの聲が聞えなくなつた。彼の目にも、圓行燈の微かな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生じて、一氣に紙の上をすべりはじめる。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書きつゞけた。

頭の中の流は、丁度空を走る銀河のやうに、滾々としてどこからか溢れてくる。彼はその凄じい勢を恐れながら、自分の肉體の力

が萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして緊く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。

「根かぎり書きつゞけろ。今己が書いてゐることは、今でなければ書けない事かも知れないぞ。」

しかし、光の靄に似た流は、少しもその速力を緩めない。反つて目まぐるしい飛躍の中に、あらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲つてくる。彼は終に全くその虜になつた。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

この時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、こうに眼底を拂つて消えてしまつた。あるのはたゞ不可思議な悅びである。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないもの

に、どうして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作者の嚴かな魂が理解されよう。ここにこそ「人生」は、あらゆるその殘滓を洗つて、まるで新しい鑛石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか。（短篇集「傀儡師」）

荷田春滿　山城稻荷社の祠官。國學者。元文元年（一三九六）歿、年六十九。

賀茂眞淵　濱松の人。國學者。明和六年（一四二九）歿、年七十三。

一二　菅の荒野

ますらをや折にふれてはたけり猪の　荷田春滿

たけきこゝろのなどなかるらむ

信濃なる菅の荒野を飛ぶ鷲の　賀茂眞淵

つばさもたわに吹くあらしかな

本居宣長　伊勢松坂の人。國學者。享和元年（一四六一）歿、年七十二。

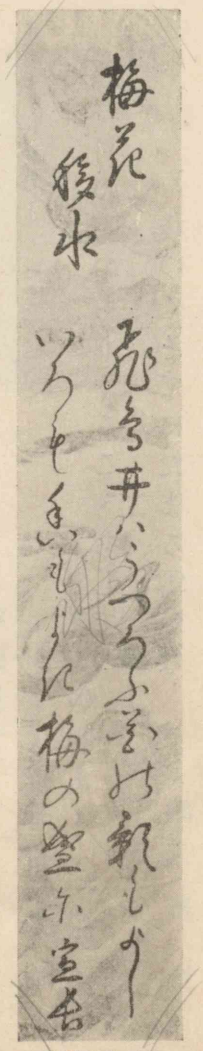
筆蹟　梅花移水　飛鳥井はうつろふ花の影もよしいろも香もよき梅の盛に　宣長

加藤千蔭　江戸の人。號は芳宜園。國學者。文化五年（一四六八）歿、年七十四。

村田春海　江戸の人。琴後翁と號し、眞淵の門人。文化八年（一四七二）歿、年六十六。

さし出づるこの日の本の光より　本居宣長

こまもろこしも春を知るらむ



本居宣長筆蹟
（短歌入門によるる）

隅田川みのきてくだすいかだしに　加藤千蔭

かすむあしたの雨をこそ知れ

たちのぼる谷のうき雲峯こえて　村田春海

檜原がおくにむらさめぞふる

小澤蘆庵
名は玄中。尾張の人。國學者。享和元年（一八〇一）歿、年七十九。

良寛和尚
越後の人。歌を善くした。天保二年（一八三一）歿、年七十四。

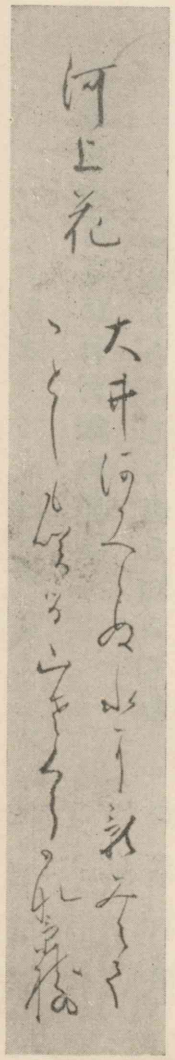
香川景樹
鳥取の人。歌人。桂園と號した。天保十四年（一八四三）歿、年七十六。

筆蹟
河上花　大井河かへらぬ水に影みえてことしも咲ける山さくらかな　景樹

栗もるみ柿もいろづきうなゐらの
ほこらしげなるときはきにけり　良寛和尚

いかなるが苦しきものと問ふならば
人をへだつるこゝろとこたへよ　香川景樹

照る月の影のちりくるこゝちして
夜ゆくそでにたまる雪かな　小澤蘆庵



香川景樹筆蹟
（名家筆蹟考によるる）

加納諸平
遠江の人。國學者。安政四年（一八五七）歿、年五十二。

橘曙覽
福井の人。國學者。明治元年（一八六八）歿、年五十七。

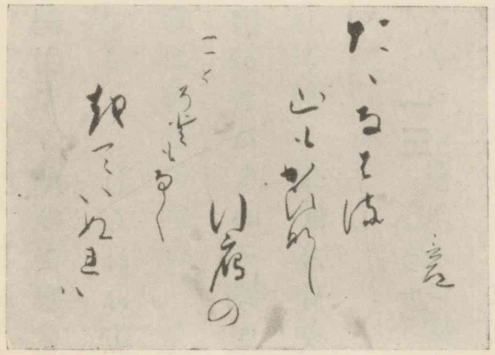
筆蹟
言道
たゝなはる山もかひなし行く雁のことぞともなく越えていぬれば

大隈言道
福岡の人。歌人。明治元年（一八六八）歿、年七十一。

あら熊はゆくへもしらず杉山の
うつほにこもるこがらしの風　加納諸平

かへり來ば
脚絆の紐も
とかぬまに
まづ顏見せよ
まちつゝあるぞ　橘曙覽

秋風に
門田のいなご
吹かれ來て
をり〳〵あたる
まごの音かな　大隈言道



大隈言道筆蹟
（短歌入門によるる）

八田知紀
鹿兒島の人。歌人。明治六年（一八七三）歿、年七十五。

太田垣蓮月
彦根の人。明治八年（一八七五）歿。年八十五。

佐佐木信綱
伊勢の人。歌人。國文學者。文學博士。

網引する舟の夜寒を身にしめて
　ねられぬ妻やころもうつらむ　　八田知紀

宿かさぬ人のつらさをなさけにて
　おぼろ月夜の花のしたぶし　　太田垣蓮月

一三　心の花

佐佐木信綱

天地ひらけて、人が生れ、言葉が生れる。人の感動は言葉によつてあらはされるが、單なる言葉でなく、言葉をしらべなして、自分の感動を傳へようとする。これが歌のはじめである。

歌のもとゐは愛づる心である。あらゆる感動のうちで、物を愛づる心は最も切である。歌は物を愛づる思をうたつたに始まる。

歌のもとゐたる愛づる心は、人間の始であり、終である。人間の情は、その始より終まで、常に愛づる心である。ねたみを、又うらみを抒べたものすら、愛づる心あればこそである。人をにくみ、世を憤るも、その奥に、人に對して愛づる心をもち、世に關心を持つからである。

歌は、物を愛づる心のあふれから出た。しかもさけびではない。さけびをのごめて調べなされたものである。

歌は雜音でない。さゝやきである。しかも力づよいさゝやきである。

歌は、時としては、朗らかなほゝゑみである。

歌は、時としては、おのづからの吐息である。涙のこぼれる音で

ある。

歌は、時としては、虹のかけはしである。時としては、追ふに消えやすい淡い夢である。また忘れようとして忘られぬ濃い夢でもある。

歌は、時としては、目に見えぬものへの願であり、祈である。

歌の根元は、魂の聲であつた。しかして又、歌の極致は魂の聲である。

繪畫は、まづ目に訴へる藝術である。音樂は、まづ耳に訴へる藝術である。歌は直接に人の胸に訴へる。歌は他の藝術よりも、はるかに直接である。

繪畫にも、音樂にも、歌がこもつてゐる。しかも歌は、より以上に繪畫と音樂とを持つてゐる。

TOMBOW

天の心に神があり、天の形に日月星辰がある。いづれも天の歌である。

地の心に人があり、地の形に山川草木がある。いづれも地の歌である。

地上に人間が生れる。人間に感情が生れる。感情の中から歌が生れる。

歌は、天と地と人と、三才をあはせ持つ。

祖先の血は子孫につゞく。祖先の思は、歌によつて子孫に傳はる。歌は命の流である。

千年以前の人の聲は、今の吾等が胸にひゞく。千年以後の人も、恐らくは今の吾等が聲を聞くであらう。歌の命は永遠である。

世を同じうして知つてをつた人の中に、また同人の中に、すぐれ

た歌人で世を早くした數人がある。まことに惜しい極みである。しかし、すぐれた歌人に死はない。永久に生きながらへてをるのである。

自分は嘗て、人が歌を詠ままほしく思ふもとの心を、歌ごころといふ言葉を以ていひあらはした。人には誰にも歌ごころがある。その歌ごころは、うるはしき心のあらはれである。歌は、うるはしき歌ごころのあらはれである。

歌は人の心の花である。花なき園はさびしい。歌なき人生はさびしい。

歌は美の宗教である。歌によつて、人の心は清められ、やはらげられ、歌をとほして、人は永久の生命に通ふことが出來る。

宗教によつて、法の悅にひたり得る人は、幸である。美の宗教によつて、歌の悅にひたり得る人もまた幸である。

上代の人の歌は、まごころから生れた。自分はその歌ひざまを、ひたぶるごころと言うた。中世の人の歌は、みやびごころから生れた。いはゆる物のあはれ、幽玄、あそび、さびと變遷してはいつたが、根本はみやびごころであつた。現代の吾等の歌は、何から生れるであらう。複雜な人間の底心の聲が、歌となるのである。

ひたぶるごころの歌から、みやびごころの歌へ。みやびごころの歌から、今は底ごころの歌である。いつの世に、神ごころの歌が生れるであらう。（信綱文集）

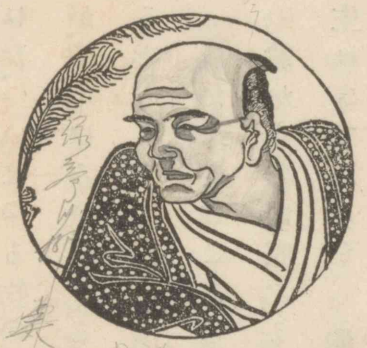
一四　川柳點

金子元臣

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷たれ、近づくもの

金子元臣　東京の人。國文學者。御歌所寄人。國學院大學教授。

皆傷く。語句簡勁にして、直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に遑あらざらしむ。時に輕薄鄙俚の調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり。いで左にその二三を擧げて言ひ試みん。



柄井川柳

あがるなと言はぬばかりの帳を出し

無筆者、年賀に來て、御慶帳の記名に困り、「さらば來ぬ分にして下され。」といひし事、昔の笑話に見えたり。今は帳の代に名刺受を玄關に出す。是も上るなと言はぬばかりなり。

竹の子は盗まれてから番がつき

急がずば
いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ野ぢの村雨（太田道灌）

塙檢校
塙保己一。盲目の國學者。群書類從の編者。文政四年（一八二一）歿、年七十六。

よく有る事なり。後の祭にもあれ、何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり、訓誡ともなる。

おさへれば薄はなせばきり〴〵す

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟取渇虎」と書けるを、いみじき手柄のやうに驚きし人、若し此の句を見ば、何とかいはん。

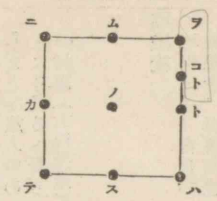
本降になつて出てゆく雨やどり

「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎてもわろし、急がでもわろし。とにかく考へ物なり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかしきなり。塙檢校が「さて〳〵、目あきは不自由な」といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ



小野九太夫　「假名手本忠臣藏」に出る。大野九郎兵衛に擬した人物

漢文に捨假名・反點のうるさく左右に附きたる樣、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには、「四角な文字に灸をする」といはばいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は中等教育を終へたる者の文章にも、狐を馬に乘せたる類のこと多し。強ちに、この狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくるゝ旅日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣く〳〵も好い方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて餘りに酷なる心地す。併し事實なるを如何せん。かの赤穗の城渡に、お金配分を唱へし小野九太夫氏は、

戸隱　長野縣水内郡戸隱村にある戸隱山。手力雄神を祀る。

能因　歌人能因法師。

袋草紙　藤原清輔の著。歌學の書。

この露骨なるものか。

かくの如く、川柳點は、尋常茶飯の出來事を捉へて、能く滑稽化するのみならず、又最も眞面目なるべき故事・傳說・史實等を題目として、その縱橫自在なる口吻を弄せり。

戸隱も神樂のあひだ髭をぬき

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隱明神なるを思ふべし。鏡

に髭ぬくひま人の所作を、神代に附會したる働あり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたりしは能因なり。天日に焦して顏だけは黑めたれど、紀行までは手が屆かずやありけん、物にその沙汰なし。作者のつけ目は此處なり。但し袋草紙に「一度においては實か、八十島の記を書けり。」とあり。

忠盛の高名の場を犬がなめ
抱きとめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛び越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯、容易に及ぶべからず。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり

盛衰記、頼政鵺を射る條に「黒雲とは見たれども、天は實に暗し。いづこを射るべしと矢どころ定かならず。」とあり。乃ち郎等隼太が、左右の櫻に鼻衝きあててまご〳〵する一場の喜劇を案出し來れるなり。作者は、いかなる剽輕者ぞ。

時致は鞭をかじつて息をつぎ
兄祐成が急を救はんとして、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我物語中の出色の快譚なり。之を圖にして大根の鞭

忠盛　平清盛の父。

隼太　頼政の郎等猪隼太。

盛衰記　源平盛衰記。

時致　曾我五郎時致。

大磯　神奈川縣中郡大磯町。

曾我物語　十卷。作者未詳。

を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるは、この作者の氣轉なり。

佐野の馬戸塚の阪で二度ころび
戸塚の阪は鎌倉入の一難處。元來乘力なき源左が痩馬、さぞや越えなづみしならん。さるを二度まで轉びたりと誇張したるに、大なる可笑しみを生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり
湊合の妙を見る。主題の蛙を言はで、突然に仕立たる處に一種の面白みあるなり。

釣れますかなごと文王そばへ寄り
流石の聖人文王と奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。たゞ「なごと」の語、胸に一物ある趣を狀

佐野　源左衛門常世。

戸塚　神奈川縣鎌倉郡

道風　小野氏。

文王　周の武王の父。

太公望　呂尙。文王武王を輔けて天下を一統せしめた人。

し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

○

番丁で目明めくらに道を聞き
帷子の賣上帳に雉子も見え
草鞋くひ迄は能因氣がつかず
忠盛はかへると糠で手を洗ひ
道風は飛んだものにて悟る也
三保谷が歸りは首に日が當り
喰ひつぶす奴に限つて齒を磨き

一五　雄辯道

土田杏村

——林の木の葉に大空が高い。靜かに舞ひ落ち

土田杏村　名は茂（ツトム）。新潟縣の人。思想家。批評家。昭和九年五月歿、年四十四。

アッシジ　伊太利の中部ペルギヤ州の小都會。

聖フランシス　伊太利の名僧。

る紅葉には、日の光が眠つてゐる。枝から枝へと飛び遊ぶ小鳥の聲も、この頃は何といふ朗かさと落着きを持つてゐる事だらう。世界に韻（ひびき）がある、悅びがある。一幅の曼荼羅圖だ。

聖フランシスの説教

アッシジの聖フランシスは小鳥に説教をしたといふが、この頃の林の中を歩くものは、誰でも小鳥に向つて物を語りたくなるであらう。

舞ひ落ちる木の葉、立ちつゞく林の樹々に向つても演説をしたくなるであらう。これ程落ちついた演説が世にあらうか。清純簡素にして、生命に充ち溢れ、語る人も聞くものも悅びの目を

あげる。すべて溶け合つてゐる、輝いてゐる、韻を呼びかはす。私はこゝにまことの演説を見たい。

私は昔北海の怒る波濤を前にして、演説の稽古をした。それは泰西の或雄辯家が、さうした修業をなしたと聞いたからである。また、或時は、今のやうな秋の日の林の中で、落ちる日を眺めながら物を語る練習をした。今になつて回顧すれば、やはり夕日の林の印象の方が私には強く殘つてゐる。それはたゞの稽古だといふ氣がしない。まことの演説の記憶として、私には殘つてゐるのだ。流れ行く小川のせゝらぎも、木の葉の光も、それは何れかの演説會場の聽衆以上に、はつきりと私の目に殘つてゐるのだ。

演説によつて戰ふといふ氣持は、もはや昔のものになつた。昔のものにならなければならぬ。戰によつて勝つたものには、また

或雄辯家　ギリシヤのデモステネスは怒濤を前にして辯舌を練つたといふ。

戰によつて背かれる日が來る。群集心理を制して他を支配したものには、また群集心理によつて支配せられる日が來るであらう。戰ふ心は粗である。粗なる心は、まことの信仰を喚ぶことが出來ない。演説には精しい心が必要である。精しい心に發した、靜かな、清純な聲が、まことに人の心に喚びかけよう。粗剛は質實とは違ふのである。粗剛はたゞ破る。心と心を結ぶものでは無い。演説は人を縱横に縛り合はせるものであつてはならぬ。心から心へ浸みとほるものでなければならぬ。

演説は所詮一つの表現であるから、その理解は、出來る限り、容易なるものでなければならぬ。どれだけ眞摯な心に發した演説であつても、表現せられなければ作品にはならない。理路を盡さなければならぬ。先づ自らを悅ばす論理を持たなければならぬ。

自らを表現の中に浸透せしめて、表現にまことあると同時に、自らを鑑賞者の地位に置いて、これを聞くものの理解に對して與へるすべての障礙を除去することに努めなければならぬ。

演說は健全でなければならぬ、信賴し得る感じを持つものでなければならぬ。この點で演說の構造はがつしりと科學的であり、散文の強みを持たなければならない。弱々しい感じ、もろい感じを嫌ふ。質實なる印象は、自らその間に養はれる。質實は自然であり、粗剛は訓練せられない反撥である。しかし同時に、演說は詩の明るさを持たなければならぬ。散文の明るさであつてはならぬ。ほがらかに通り、悅びに浸みいるその明るさである。メリケン松の安建築のやうな明るさ、街頭の招牌に描く圖案のやうな明るさであつてはならぬ。詩の明るさは直ちに韻である、陰である。

明るいだけで陰の無い演說は、表面の心に快樂を與へ、深く心を感動せしめることが出來ない。明る過ぎてもいけない、暗く鈍重であつてもいけない。演說はつねに一個の藝術的作品でなければならない。そこには藝術品について考へると殆ど同一の心置きが必要なのである。

それは强みを持たなければならぬ。語つて人に感銘を殘す力點を持たなければならぬ。凡々諄々と語つて、殘り無く人の理解を得るところがあつても、同時に固く執つて動かぬものがなければならぬ。短い要點は繰返されてもよい。また別の形式でこれを高調してもよい。理論の筋道を時々回顧して行くことも必要である。たゞ說話の繰返しは演說の內容を遲緩せしめる。徒らに長いものは却つて感銘薄く、時には聽者の反感をさへ買ふであ

らう。強く主張すると同時に快く放つところも必要である。確實に建設する他方で、樂しく想像することも必要である。要は自らを表現者の立場に置くとともに、自らを聽者の立場に置く修練が必要なのである。

多くの人々の納得を得る演說は、恐らく不可能なるものであらう。すべての人に語つて、しかも一人の心よりなる同感者を得るのが、まことの演說であらう。敵を愛さなければならぬ。たゞ自己の同感者にのみ語る態度は、貴族的・非社會的であつて、狹く見える。またすべての人に同感を得ようとして迫る態度は、迎合的になる危險を持ち、また結局すべての人の心をさびしくさせるであらう。聽者に反感を持つてはならぬ。たゞの一人の理解者をも持たない演說はあり得ないと考へて、自らの心の平安を得なけれ

ばならぬ。臆してはならぬ。強く壓制的であつてはならぬ。いやしく訴へてはならぬ。誇りかに敎へてはならぬ。たゞ沈毅と平安とである。自らの地位を聽衆と同一のところに置くのである。社會の一員として悅ばしい義務を果すのである。

所謂雄辯がその効果に於て雄辯になつてゐない場合は少くない。聽衆がたゞその雄辯をだけ感嘆し、その演說の內容を忘却して歸る演說は少くないものである。それはまことの雄辯とはいはれない。演說は一時を支配するものではない。永遠に心の結合を求めるものだ。その演說の主張する要點を印象に殘して歸る演說は、先づ取るべき演說であらう。主張の理路を長く記憶に止めるものに至つては、すでに優れた演說だ。しかし結局その主張の要點、その主張への理路と共に、その主張者の人としての靜か

な感銘を長く心に殘す演說こそは、まことに雄辯といふ言葉の適當する演說であらう。技巧や身振が聽者の心に殘つてはならぬ。雄辯であつたことの印象が聽者の心に殘つてはならぬ。雄辯と知られないで、まことに聽者を打つ演說こそは、眞の意味の雄辯である。

所詮、演說は客觀的であり、理論的であると同時に、彼自身の表現でなければならぬ。彼自身のものでなければならぬ。彼自身でなければならぬ。演者と聽者との別を忘れしめるものでなければならぬ。何等の支配なく、說破なく、雄辯も亦消えて跡なきものでなければならぬ。まことの雄辯は所謂雄辯と反對の極に向つてゐる。

私は秋の林を歩いて、到るところにまことの雄辯を聞いた。それは小鳥の囀である、聲なく落ちる木の葉の光である。せゝらぎの水、その音のしづかに絕えるところは、却つて雄辯だ。おゝ大落日の雄渾なる姿よ。私はその雄辯に自らの魂を淨化せしめる。

（草燼心境）

一六　方丈記

鴨長明

一　行く川の流

行く川の流れは絕えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。世の中にある人と住家と亦かくの如し。玉敷の都の中に棟を竝べ甍を爭へる尊き卑しき人の住居は、代々を經て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこ

鴨長明
後鳥羽上皇の時和歌所の寄人となり。後に出家した。建保四年（一八七六）歿、年六十四。方丈記は其の著。

行く川
子在ニ川上ニ曰逝者ハ如レ斯夫。不レ舍ニ晝夜ヲ。（論語）

れに同じ。〻處もかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死し、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて何方へか去る。また知らず、假の宿り誰がために心を惱まし、何によつてか目を悅ばしむる。その主人と住家と無常をあらそひ去るさま、いはば朝顏の露に異ならず。あるは露おちて花殘れり、殘るといへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて露なほ消えず、消えずといへども夕を待つことなし。

朝顏の露　人生如二朝露一。（漢書）

安元三年　高倉天皇の朝。此の年八月治承と改元。

戌の時　午後八時頃。

二　世の不可思議

凡そ物の心を知れりしより以來、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不可思議を見る事やゝ度々になりぬ。去んぬる安元三年卯月二十八日かとよ、風烈しく吹きて靜かならざりし夜、戌の時ばかり、都の巽より火出で來りて乾にいたる。はてには朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜が程に塵灰となりにき。火元は樋口富小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けりとなん。吹迷ふ風にとかく移り行く程に、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりは、ひたすら焰を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じて普く紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焰、飛ぶが如くにして一二町を越えつゝ移り行く。その中の人、現心あらんや。或は煙にむせびて仆れ伏し、或は焰にまぐれて忽ちに死しぬ。或は又纔かに身一つ辛くして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍・萬寶さ

巽　辰巳。東南の方角。

乾　戌亥。西北の方角。

七珍　金・銀・瑠璃・車渠・瑪瑙・珊瑚・琥珀。

鴨長明

ながら灰燼となりにき。その費えいくそばくぞ。このたび公卿の家十六燒けたり、ましてその外は數を知らず。すべて都の中三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬・牛の類邊際を知らず。人のいとなみ皆愚なる中に、さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し心を惱ますことは、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

また治承四年卯月二十九日のころ、中御門京極のほどより大きなる辻風起りて、六條わたりまで嚴しく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくる間に、その中に籠れる家ども、大きなるも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり、桁・柱ばかり殘れるもあり。また門の上を吹放ちて四五町がほどに置き、また垣を吹拂ひて隣と一つになせり。況や家の內の寶、數を盡して空に揚り、檜皮・葺板の類、冬の木の葉の風に亂るゝが

中御門　待賢門の通稱。それより東に通る筋。

如し。塵を煙の如く吹立てたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りとよむ音に、物いふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。家の損亡せるのみならず、これを取繕ふ間に身を害ひてかたはづけるもの數を知らず。この風、坤の方に移り行きて、多くの人の歎をなせり。辻風は常に吹くものなれど、かかることやはある。只事にあらず。さるべき物のさとしかなどぞ疑ひ侍りし。

坤　未申。西南の方角。

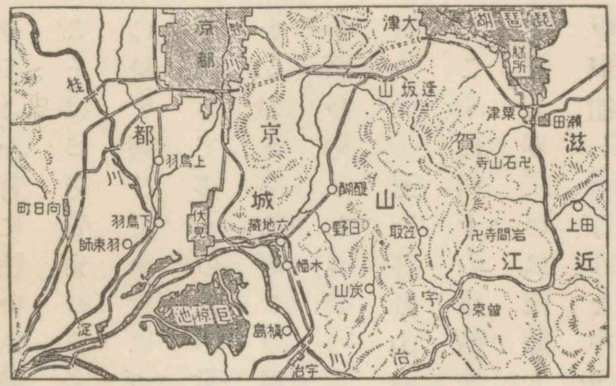
三　日野山の閑居

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃のすみかになずらふれば、また百分が一にだにも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々にかたぶき、住家は折々

日野山　京都府宇治郡醍醐村。

いはば旅人　亦猶行人之造旅宿、老蠶之成獨繭矣。其住幾時乎。（池亭記、慶滋保胤）

にせばし。その家のありさま世の常ならず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛がねをかけたり。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さんが爲なり。その改め造る時、幾ばくの煩ひかある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、さらに他の用途いらず。



日野山附近

いま日野山の奥に迹をかくして後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、うちには西の垣に沿へて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に、普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に、小さき棚を構へて、黑き皮籠三四合を置く。すなはち、和歌管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に、箏・琵琶おの〳〵一張を立つ。いはゆる折箏・つぎ琵琶これなり。東に沿へて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて、夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机を出せり。枕の方に、すびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地を占め、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。すなはち諸の藥草を植ゑたり。假の庵の有樣かくの如し。

その處のさまをいはば、南に筧あり。岩を疊みて水を溜めたり。林、軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら、迹を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり。觀念のた

普賢　文殊と共に釋迦佛に侍して佛法を輔ける菩薩。

不動　五大明王の一。其の中央に居る大日如來の化身。

往生要集　六卷。源信僧都の著。

より無きにしもあらず。春は藤浪を見る、紫雲のごとくして西の方に匂ふ。夏は子規を聞く、かたらふ毎に死出の山路をちぎる。秋は蜩の聲耳に滿てり、空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐れむ、つもり消ゆるさま、罪障に喩へつべし。

もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに、妨ぐる人もなく、又恥づべき友もなし。ことさらに、無言をせざれども、ひとり居れば口業ををさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らん。もし迹のしら波に身を寄する朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風、葉をならす夕には、潯陽の江を想ひ遣りて源都督のながれをならふ。もしあまりの興あれば、しば〳〵松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ

迹の白波　世の中を何にたとへむ朝ぼらけこぎゆく船のあとのしら波（拾遺集、沙彌滿誓）
岡の屋　宇治川の東岸。
滿沙彌　笠麿。剃髮して滿誓といふ。元正天皇の時の人。
潯陽の江　潯陽江頭夜送レ客、楓葉荻花秋瑟々。（琵琶行、白樂天）
源都督　桂大納言源經信。琵琶の名手。承德元年（一七七）薨、年八十二。
秋風・流泉　琵琶の曲名。

拙けれども、人の耳を悅ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち此の山守が居る處なり。かしこに小童あり。時々來りて相訪ふ。若しつれ〴〵なる時は、これを友として、遊びありく。彼は十六歳、我は六十、その齡殊の外なれど、心を慰むることはこれ同じ。あるは、つばなを拔き、岩なしを採る。又ぬかごをもり、芹を摘む。あるは、すそわの田居に到りて、落穗を拾ひて、ほぐみを作る。若し日うらゝかなれば、嶺に攀ぢのぼりて遙かに故鄕の空を望み、木幡山・伏見の里・鳥羽・羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみ煩ひなく、志遠くいたる時は、これより嶺つゞき、炭山を越え笠取を過ぎて、岩間にまうで、石山を拜む。もしは又粟津の原を分けて、蟬丸の翁

木幡山・伏見・鳥羽　みな京都府紀伊郡
羽束師　同縣乙訓郡。
勝地は　勝地本來無二定主一。大都山屬レ愛レ人。（白氏文集）
炭山・笠取　京都府宇治郡。
岩間　滋賀縣滋賀郡正法寺の觀音。
石山　同上石山寺の觀音。

蟬丸の翁の跡　蟬丸は醍醐天皇時代の琵琶の名人。逢坂山に草庵を結んでゐたといふ。

猿丸太夫の墓　猿丸太夫は平安朝初期の歌人。墓は滋賀縣栗太郡田上村大字曾束にある。

眞木の島　京都府久世郡。

山鳥の　山鳥のほろ〳〵となく聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ（玉葉集、行基）

峯のかせき　山ふかみなるゝかせきのけぢかきに世に遠ざかる程ぞ知らるる（西行）

恐ろしき山　山深みけぢかき鳥の聲はせで物おそろしきふくろふの聲（西行）

が跡をとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸太夫が墓をたづぬ。歸るさには、折につけつゝ、櫻を狩り紅葉をもとめ、蕨を折り木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家苞にす。もし夜靜かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。叢の螢は、遠く眞木の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峯のかせきの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。あるは埋火を搔きおこして、老の寢覺の友とす。恐ろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景氣、折につけて盡くることなし。いはんや、深く思ひ、深く知れらん人のためには、これにしも限るべからず。

大かた、この處に住み初めし時はあからさまと思ひしかど、今すでに五とせを經たり。假の庵も稍ふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠り居て後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、盡して之を知るべからず。度々の炎上にほろびたる家又いくそばくぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。

三界　欲界・色界・無色界。華嚴經に「三界唯一心。心外無別法。」とある。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば牛馬七珍も由なく、宮殿・樓閣も望なし。今さびしき住居一間の庵、みづから之を愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることを恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に着することをあはれぶ。もし人このいへる事を疑はば、魚鳥の分野を見よ。魚は水にあかず、魚にあらざれば其の心をいかでか知らん。鳥は林を願ふ、鳥に

あらざれば其の心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まずして誰かさとらん。（方丈記）

一七　平家雜感

高山樗牛

一　都落

凡そ世に傳へ遺されたる歴史は多かれど、平家の都落ばかり、哀れにもまた目覺しきはなかるべし。南都の餘燼いまだ冷めず、墨股の勝閧なほ響きぬるに、信越俄かに雲亂れて、木曾の五萬騎は比叡のあなたに充ち滿ちぬ。宇治・淀の備もろくも潰えて、都も今を限とぞ見えける。あはれ、一門の天下身を置くに處なし。世はかく憂きを、三吉野の山のあなたにもかくれがは無きか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の行幸に御

高山樗牛
名は林次郎、樗牛と號した。文學博士。明治三十五年歿、年三十二。

平家の都落
壽永二年七月。

南都の餘燼
治承四年二月平重衡が奈良法師を攻めて其の寺を燒いた。

墨股の勝閧
壽永元年三月平知盛等が源氏を美濃の墨股川に破った。

木曾
壽永二年七月木曾義仲は叡山に據った。

三吉野の
三吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせん（古今集）

一炬の煙
楚人一炬、可レ憐焦土。（杜牧、阿房宮賦）

燒野の原
故郷を燒野の原とかへりみて末も煙の波路をぞゆく（平經盛）

平家の都落（春日權現靈驗記繪卷）

供して、一旦の凌辱を忍ばまし。あはれ生死も知らぬこの別路、再び歸り來べき都ならねばとて、六波羅・池殿・西八條以下、一門・譜第の邸宅・宿房、京・白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となし果てぬるこそあわたゞしかりしか。

こゝに鳳闕の礎空しく殘り、椒房の嵐夜々かなしむ。保元このかた、天下の榮華を盡したる花の都を、燒野の原と顧みて、末は煙の涙、雲の涙、行方も知らずさすらふらん。直衣・

翠華搖々　白樂天の長恨歌の句。

笛吹く人　壽永二年十月平清經は月夜從容笛を吹いて海に投じた。

束帶の身にも、今は黑金の衣を著けたれど、詠歌の餘哀に狃れて、弓矢の譽を勵まん心地せず。さても棄て難き命や。今こそはうき世なれ。さすがにしのばるゝ昔の樣の、夢に入るをば如何にかせん。翠華搖々として西に向へば、秋風到る處に野に滿てり。嗚呼きのふは東關のもとに轡をならべて十萬餘騎、けふは西海の波に纜を解きて七千餘人。行方の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂にやどる月の影、すべて心を傷ましむるもののみなり。月の出でくる山の端のあなたの空を故鄕とや、日暮、舳に立ちて笛吹く人あり。響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳を欹つ。嗚呼この時この人の懷、果して如何。

二　清盛入道

世にもあはれなるは、平家とぞいふめる。げに、この一門の盛衰を考ふるに、心も詞も及び難きなり。案ずれば一旦の榮華に耽りて、百年の計をおもはず。今や秋の嵐の吹き荒ばんずる朝も、春の夜の夢なほおぼろにして、覺めての後は、さすがにうき世と觀ずれども、先世後代、既に梭をかへたるを如何にかすべき。今を昔にかへさんすべもかた絲の、よりくづれたる世こそ、かへすがへすも是非なけれ。

一題の遺詠　忠度の故事。

己身の現在　維盛の故事。

入道相國　平清盛。

されば風雅にかくれては、一題の遺詠に今生の本懷を終へ、恩愛に絆されては、己身の現在に來世の果報を思はず。あはれは桐の一葉に散りそめて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば怪しきまでに哀なりける運命かな。さるにても、入道相國の生涯こそ、なか〳〵に面白かりけれ。

弓矢のいさをし、はや畢んぬ。朝家の權柄、今はた盛なり。一門、

殿上にのぼりて六十餘人、私封、全國にわたりて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗、皆こゝにあつまれり。昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今は「この人ならでは人にあらず」と唱へられ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏これがために目を側つるばかりなり。されば、十善の帝王かしこくも外戚の威に壓されたまひて、八幡・賀茂の御幸は、八重の潮路の嚴島とぞ觸れられける。なにがしの卿が「入る日をも招き返さんずる勢」と書かれしも、げにことわりと覺ゆ。不敵なる入道は、私門の榮に飽き足らで、世に人もなげに振舞は

平清盛

京師の長吏　陳鴻の長恨歌傳の楊氏の勢力を敍した條に、「京師長吏、爲レ之側レ目。」

嚴島　安藝の嚴島神社。平氏の尊信した所。

れけるこそゆゝしけれ。こゝに卿相・雲客流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射山の嵐をしのばせ給ふ。中にも重代の帝座俄かに動きて、愛宕の里のあはれをとゞめけるこそ、なか〳〵にあさましかりしか。

城南の離宮　治承三年清盛は後白河法皇を鳥羽殿に幽し奉つた。

射山　藐姑射山の略。

重代の帝座　治承四年福原に遷都した。

愛宕の里　平安京ないふ。當時の落首に「百年を四かへりまでに過ぎ來にし愛宕の里の荒れやはてなん」

咲きも殘らず散りも初めぬ櫻花、嵐なくともかくてやは已むべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萌黃匂の鎧著て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀帶佩こそ、あつぱれ平門隨一の貴公子と見えつれど、富士川の水鳥に算を亂せる十萬餘騎は、いたづらに長き世の笑をとゞめたるに過ぎず。加ふるに北土俄かに雲亂れて、木曾の山氣やうやく都に逼り、兩山の衆徒また既に反覆の色をしめしぬ。平家の運命日に益急なり。

兩山　叡山延曆寺と奈良の興福寺。

時しも入道は病にかゝりぬ。あはれ病の床のさびしきに、霜夜の鐘の響の枕に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至るまで、六十四年の生涯を靜かに憶ひ出でたる時、而して命の際の身ぞと觀じたる時、彼果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身に餘りて、保平のいさをしまたいふに足らずと思はざりしか。おのれにつらかりける人々を、かくまでに惱ましたることの、罪深しとは思はざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしはては、軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせつることの、中にも非道の所行なりと思はざりしか。更に小松の内府が身命にかへて、乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛のきづなに、轉た悔恨の心を動かすことなかりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事のきはに、今生の名利を棄て

保平　保元・平治。

小松の内府　内大臣平重盛。小松殿と稱した。

六慾　眼・耳・鼻・舌・身・意の六根の慾。

て未來の淨樂を欣求する一念を發することなかりしか。皆あらず。入道は死に至るまでその初念を翻すことなく、まさにその生けるが如くにして死せしなり。

今はの詞に曰く、「兵衞佐頼朝が首を見ざりつるこそ、かへすがへすも遺憾なれ。われ死したりとて佛事孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず。急ぎ討手を下し、彼が首を刎ねて、わが墓前に懸けよ。これぞわれに對しての今生後生の孝養にてはあらんずる。」と。一念の執着に、必衰の運命をものともせず、三世の因果を身にひくとも、なほ怨敵に報いんことを必せり。その事の可否は姑く措き、とまれかくまれ、丈夫たる心の強きは感ずべきなり。たとひ四海の波を翻して彼が頭にそゝぐとも、なほこの一我を如何ともすること能はざらん。六尺の眇軀、こゝに至れば天地の大にも

比ぶべく、運命われに於て浮塵にひとしからん。いはゆる死して而して生けるものといふべきか。（樗牛全集）

死して云々　ローマのキケロはその友スキピオの死を弔して「死せりと雖も猶生く」と言つた。

一八　光頼參内

さる程に内裏には、同じ十九日公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衞門督光頼卿、此の程は信頼卿の擧動過分なりとて、不參にておはしましけるが、參内して承らんとて、殊にあざやかなる束帶引きつくろひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、傅子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雜色の裝束にいでたゝせ、「自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ。」とて、御身近く置き、其の外清げなる雜色四五人召し具して、大軍陣を張りて所々門々を固く守護しけるを事ともせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵共も大きに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。

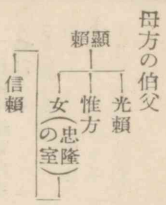
十九日　平治元年十二月十九日。

光頼　藤原顯頼の子。權大納言正二位に進み桂大納言といふ。この時年三十六。

信頼　藤原信頼。光頼の甥。時に年二十七。

紫宸殿の後を經て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、其の座の上臈達皆下にぞ著かれたる。光頼卿「こは不思議の事かな。人はいかにふるまふとも、あれは右衞門督、我は左衞門督なれば、下には著くまじきものを。」と思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそ餘りにしどけなう見え候へ。」と色代して、しづ〳〵と歩み、信頼卿の上にむずと著き給ふ。

長方　藤原顯長の子。從二位權中納言に至つた。



衞府督
右衞門督信頼を指す。

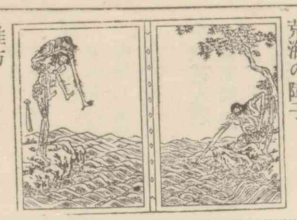
光頼卿は信頼の爲には母方の伯父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、著座の公卿、あなあさましと見給ふに、光頼卿は下襲のしり引直し、衣紋つくろひ、笏取直し、氣色して、「今日は衞府督が一座すると見えて候。召すに參ぜざらん者をば、死罪に行はるべしとやらん承つて參内する所なり。抑、何事の御諚ぞ。」と問ひけれども、信頼物も宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿つい立つて、「惡しう參つて候ひけり。」とて、しづ〳〵と歩み出でられけり。

庭上に充ち滿ちたる兵どもこれを見奉つて、「あはれ此の殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衞門督殿の座上に著く人一人もおはしまさざりつるに、仕出したる事よ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれ、此の人を大將として合戰せば、いかばかりか頼もしからん。」と申せば、傍なる者、「昔頼光、頼信とて源氏の名將おはしましき。其の頼光を打返して光頼と名乘り給へば、これも剛にましますぞかし。」といへば、又傍より、「なぐ、其の頼信を打返して信頼と附き給ふ右衞門督殿は、あれ程臆病にはおはしますぞ。」と言へば、「壁に耳、天に口といふ事あり。怖ろし〳〵。聞かじ。」と云ひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。

光頼卿かやうにふるまひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小蔀の前、見參の板高らかに踏み鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議として催されつる間、參じたれども、承り定めた

頼光
源滿仲の子。大江山の山賊退治を以て有名である。

頼信
頼光の弟。平忠常の亂を平げた。



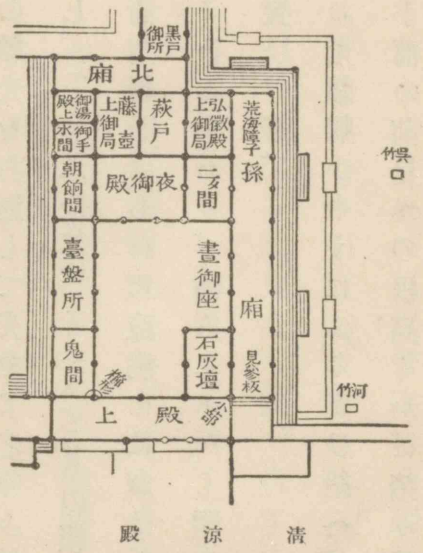
荒海の障子

惟方
檢非違使別當藤原惟方。

る事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、其の人皆當時の有職、然るべき人どもなり。其の中に入らんこと甚だ面目なるべし。さても先日右衞門督が車の尻に乘つて、少納言入道が首實檢の爲に、神樂岡へ向はれけることは如何に。以ての外然るべからざる擧動かな。近衞大將・檢非違使別當は他に異る重職なり。其の職に居ながら、人の車の尻に乘り給ふこと、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大きに耻辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならず。」と宣へば、別當「それは天氣にて候ひしかば。」とて、赤面せら

少納言入道
藤原通憲入道信西。

神樂岡
今の京都市左京區吉田神社の東方、俗に吉田山といふ。



れけり。

光頼卿重ねて「こは如何に、勅諚なればとて、いかでか存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣・三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣又十一代、承り行ふことは皆これ德政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴つて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝ程の事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切部の宿より馳上るなるが、和泉・紀伊の國・伊賀・伊勢の家人等待受けて馳せ加はり、大勢にてあなる。信頼卿が語らふ所の兵いくばくならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。若し又火などを懸

勸修寺内大臣
藤原高藤。三條右大臣高藤の子、定方。

大貳清盛
清盛は當時太宰大貳の官にあつた。

切部の宿
和歌山縣日高郡にある。

主上　二條天皇。
上皇　後白河上皇。
内侍所　賢所。

けなば、君も爭でか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。如何に況や君臣ともに自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、此の時にあるべきをや。右衞門督は、御邊に大小事を申し合はするとこそ聞ゆれ。相構へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますぞ。」「黑戸の御所に。」「上皇は。」「一本御書主上は何處におはしますぞ。」「内侍所は。」「溫明殿に。」「劒璽は何處に。」「夜の御殿に。」と、左所に。」「内侍所は。」「溫明殿に。」「劒璽は何處に。」「夜の御殿に。」と、左衞門督次第に尋ね給ひければ、別當かうぞ答へられける。

「また朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、「それには右衞門督住み候へば、其の方ざまの女房などぞかげろひ候らん。」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、「世の中は今はかうござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君を

許由　支那古代の隱者。堯が天下を彼に讓らうとするのを聞き耳が汚れたといふので潁水に洗つた。
平治物語　三卷。作者未詳。平治の亂の始末を記した軍記物語。

ば黑戸の御所に遷し進らせたんなり。末代なれども、さすが日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神・正八幡宮は王法をば如何に守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝には未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろのろしげに憚る所もなくくどき給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげにて立たれたれども、且は悲しくて、「吾いかなる宿業に依つて、かゝる世に生れ合ひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有樣を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、袍の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出で給ひける。（平治物語）

一九　國語の力

我が日本國は、一家族の發達して一人民となり、一人民の發達して一國民となれる者にして、神別・皇別・藩別の名はあるものの、實は今日となりては、すべて此等を鎔化し去りたるなり。　こは實に國家の一大慶事にして、一朝事あるの秋に當り、我々日本國民が協同の運動をなし得るは、主としてはその忠君愛國の大和魂と、この一國一般の言語とを有つ大和民族なるに因りてなり。　故に我々の義務として、この言語の一致と人種の一致とをば、帝國の歴史と共に、一歩もその方向より誤り退かしめざるやう勉めざるべからず。かく勉めざる者は、日本人民を愛する仁者にあらず、日本帝國を守る勇者にあらず、まして東洋の未來を談ずるに足る智者にはゆめあらざるなり。

さて、一人民が話す言語とその人民の性質との間には、最も入り組みたる關係あるものにて、その人民が一事物に對して感じ或は考ふる上の總ての事は、皆その言語に反射し出づるなり。　故に予輩は、言語をば、その話す人の精神上に生活する思想及び感情が、外に出でて化身したるものと見做すに躊躇せざるなり。

試みに支那語を見よ。　如何に仁義の說が彼等の間に行はれしかは、歴史を待たずして言語の上に明かなり。　試みにサンスクリットを研究せよ。　如何に古代の印度人が分析的能力に富みしかは、彼等の哲學書・宗教書・言語學書等を繙くまでもなく、其の語彙のみの上よりも斷言し得べし。　文人國に詩歌の語多く發達し、武人國に武人の語多く繁昌す。　希臘語は古代の哲學・美術の言語なり。羅甸語は中古の法律・宗教・文學の言語なり。　英語の商業に於ける、

サンスクリット　Sanskrit. 梵語。

佛語の社交に於ける、獨逸語の理論に於ける、皆それ〴〵其の人民の長所によりて發達したるものなり。

言語は、これを話す人民に取りては、恰もその血液が肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、これを日本語にたとへていへば、日本語は日本人の精神的血液なりと謂ひつべし。日本の國體は、主としてこの精神的血液にて維持せられ、日本の人種は、この最も強く最も永く保存せらるべき鎖のために散亂せざるなり。故に大難の一たび來るや、この聲の響く限は、七千萬の同胞は何時にても耳を傾くるなり、何處までも赴いて、飽くまでも助くるなり、死ぬるまでも盡すなり。而して一朝慶報に接する時は、樺太のはても臺灣朝鮮のはしも、一齊に君が八千代をことほぎ奉るなり。もしそれ此の言葉を外國にて聞く時は、こは實に一種の音樂なり、一種天堂の福音なり。

かくの如く、その言語は、單に國體の標識となるのみにあらず、又同時に一種の教育者、所謂なさけ深き母にてもあるなり。我々が生るゝや、この母は我々をその膝の上に迎へ取り、懇ろにこの國民的思考力と、この國民的感動力とを、我々に教へ込みくるゝなり。故にこの母の慈悲は、誠に天日の如し。苟もこの國に生れ、この國民たり、この國民の子孫たるものは、誰かはこの光を仰がざるべき。獨逸にこれを「ムッター、スプラッハ」或は「スプラッハ、ムッター」といふ。先なるは「母のことば」後なるは「ことばの母」の義なり。よく言ひ得たりといふべし。

ムッター、スプラッハ
Muttersprache.

されば、言語の上には、我々が心中に一日も忘れかぬる生活上の記念、殊に人生の神世とも謂ひつべき小兒の頃の記念が、結び附き

居るものと知るべし。我々が幼かりし頃、終日の遊に疲れ果てて、すや〳〵と眠に就かんとせしをり、母君は如何に優しき聲にて、ねよとの歌を謠ひ給ひしか。頑是なき小兒心にわるふざけなどして打廻りし時、父君は、如何におごそかに教訓を垂れ給ひしか。さては隣家の垣に攀ぢて栗の實を拾ふに餘念なく、或は春のうらゝかなる野邊に、幼き友どもと蓮華草など摘み歩きたる、すべて當時より使ひ來れる言葉は、當時の人名・地名と共に、何とも言はれぬ快感を我々に與ふるなり。續いては小・中學校の言葉、長じては學生の言葉、市民としての言葉、或は職業により、階級により、地方によりての言葉等、皆それ〴〵の生活をこの上に反映す。所謂「言語は其の話す人を束縛す。」とは此の事なり。故に外國にて人となりしか、或は外國人の學校にて外國語の教育のみを受けたる人にあらざ

るよりは、この言語の恩澤を蒙り、この言語に感謝の意を表せざるものなし。

そは如何にまれ、此の自己の言語を論じて、その善惡をいふは、なほ自己の父母を評するに善惡を以てし、自己の故鄉を談ずるに善惡を以てするに均し。理を以てせば、或は然らざるを得ざらん。而もかくの如きは、眞の愛にはあらず。眞の愛には選擇の自由なし、なほ皇室の尊愛に於けるがごとし。この愛ありて後、始めて國語の事談ずべく、その保護の事亦計るべし。

されば、國民がその國の言語を尊ぶことは一の美德にして、偉大なる國民は必ず自國語を尊び、決して之を措いて他の外國語を尊奉せず。情の上よりその自國語を愛し、理の上よりその保護改良に從事し、而して後この上に確乎たる國家教育を布くを常とす。

こは言ふまでもなく、苟も國家教育が、その國家の觀念の上より、その一員たるに愧ぢざる人物の養成を以て目的とする以上は、そは先づその國の言語、次にその國の歴史、この二つを蔑にしては、決してその功を見ること能はざればなり。これ我が國民たるものの、須臾も忘るべからざる所なりとす。（國語のため第一）

○

そらみつやまとの國は　すめ神のいつくしき國　言靈
のさきはふ國と　語りつぎ言ひつがひけり　（山上憶良）

とつ國に生ひぬ櫻のかげしめて群れつゝうたふやまと言の葉　（村田春海）

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥のあとを見るのみ人の道かは　（荷田春滿）

平家物語抄

後篇

平家物語に就いて

藤岡作太郎

藤岡作太郎　國文學者。文學博士。號は東圃。金澤の人。明治四十三年（一九一〇）歿、年四十一。

「平家物語」は平安末期に於ける源平の爭亂を描きたるものにして、結局平家が西海に落ち行きて、底の藻屑と化せる一篇の悲劇なり。

「平家物語」を讀みて吾人の最も感興を深うする所以のものは、そが歴史上空前の事實たる源平爭鬪の一大悲劇を寫せる點にあり。從來、文運盛にして、作家が想像に生み來れる名篇傑作少からずといへども、わが國未だ嘗てかゝる雄大沈痛の悲劇に接せず。壽永の天地を舞臺として自然が演ぜるこの活歴史は、貧弱なる人間想像の埒を超越して、言葉の儘に小說よりも遙かに奇なるものありしなり。もとより「平家」は純粹正確なる歴史にはあらざるべし。その間著者が想像も交れり、傳

說の誤れるものも亦多かるべし。而もその歴史的事實を土臺として取捨鹽梅せるものなるに至りては、斷として疑ふべくもあらず。況やその事實たる、わが歴史にあらはれたる最大悲劇にして、その局面の變化に富める、また尋常一樣のものにあらざるをや。「平家」が今日なほその讀者をして歎賞の聲を絶たざらしむるもの、洵に故ありといふべし。

源平爭亂の事實は何が故に詩的にして多趣味なるか、曰く、平家一門二十餘年の盛衰が、急轉掌を覆すが如きものありしを以てなり。たゞ榮枯地を變ふる、夢の如くなりしのみを以てせば、所謂南北朝と多く異なることなし。されど是は從來固定したりし社會の階級の動搖して、全く調和を缺ける新舊の二潮流が、こゝに始めて久しく蓄へ來れる威力と新進氣鋭の生氣とを以て、堤を決して衝突せるもの、混沌澎湃の狀ほゞ想見すべからずや。所謂南北朝の戰亂は、その初はまた武士と公卿との爭なりきと雖も、而も當時の公卿は既に武を練ること日久しく、實は武を以て武に當れるものなり。源平時代の爭鬪はすなはち然らず、源平兩武家の戰といふも、まことはこれ文と武との爭なり、新と舊と

の戰なるなり。この大混戰の渦中に投じて、新舊衝突の犧牲となれるものを平家の一門とす、特に清盛が一生こそ、これを代表して餘あるものなりしか。

宇治川の合戰脆くも敗れて、腹かき切らんと扇の芝に坐したる源三位頼政が最期の辭に「埋木の花さくこともなかりしに身のなるはてぞ悲しかりける」とよめる、薩摩守忠度が都落に、馬の首を廻らして、俊成が五條の館を叩き、この中一首にても撰集に入るべきものあらば生涯の面目なりとて、己の家集を預けて去れる、また一の谷の櫓の上に吹きすさぶなる笛の音に、木戸口に眞ッ先かけたる朴訥の熊谷直實をして、平家の公達は姿も心もやさしき上臈よなとて、感歎の聲を放たしめし風流などの、詩味油然として興趣湧くが如き感あるも、當時新舊思想を代表せる文武の對照が、餘りに著しきによるなるべし。「平家」の著者は、固よりまたこの對照の、讀者の感興を惹くに足るべきを信じ、肉動き骨鳴る勇ましき戰物語の間々には、この優美可憐なる話柄を挿み、以てその庶幾するところを達したるは、苟くもこの篇を繙くものの、容易に看取す

るところなるべし。

平家物語は縱に雄大悲壯の戰記を貫き、橫に哀憐優雅なる物語を錯綜すると共に、また實に幽玄奧妙の佛敎趣味を點綴す。これ著者が平家物語一篇を述作せる目的の存するところ。畢竟この主張ありて、治承の春を名殘に、壽永の秋を西國さして落ち行ける、夢よりも果敢なき平家一門の榮枯盛衰の史に、言々涙あり、句々同情あり、讀む者をして、讀誦一過、忽ち無常厭世の感を懷いて佛道に歸入せしめずんば止まざらんとす。その冒頭を「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。」といふに起して、結末の灌頂の卷に、建禮門院が後白河法皇への物語に、その身の經過せる一生を六道に譬へたまへりといへるに考へて、その全豹を推すべし。（國文學史講話）

祇園精舍　釋迦最初弘法の道場。五精舍の一。

沙羅雙樹　昔印度拘尸那羯羅城外に沙羅樹林があり、其の四木特に高く、相對して雙をなす。釋迦は此間に敎を說き、又此處に入滅した。其時此の木枯れて白色となつたといふ。

趙高　秦の佞臣。

王莽　漢の逆臣。

周伊　未詳。朱异の誤か。朱异は武帝に仕へ遂に梁を亡した者。

祿山　安祿山。唐の逆臣。

承平・天慶　朱雀天皇の年號。

將門　平將門。

純友　藤原純友。

康和　堀河天皇の年號。

義親　源義家の子。

平治　二條天皇の年號。

信賴　藤原信賴。

一　祇園精舍の事

祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。驕れるもの久しからず、たゞ春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ。ひとへに風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、これらは皆、舊主先皇の政にも從はず、樂を極め、諫をも思ひ入れず、天下の亂れん事を悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡じにしものどもなり。近く本朝を窺ふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信賴、これらは驕れる事も、猛き心も、皆ことりゞなりしかども、間近くは六波羅の入道、前の太政大臣平朝臣清盛公と申しゝ人の有樣、傳へ承るこそ、心も詞も及ばれね。

平氏略系
桓武天皇—葛原親王—高視王—高望王—國香—貞盛—維衡—正度—
　正衡—正盛—
　　忠盛—清盛
　　貞光—家房—
　　家貞—貞能

得長壽院
京都東山に建立された寺。後に後白河上皇御創立の蓮華王院に併合された。世に三十三間堂といひ今猶存す

その先祖を尋ぬれば、桓武天皇第五の王子一品式部卿葛原親王九代の後胤、讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛の朝臣の嫡男なり。かの親王の御子高視王、無官無位にして失せ給ひぬ。その御子高望王の時、始めて平の姓を賜ひて上總介になり給ひしよりこのかた、忽ちに王氏を出でて人臣に連る。その子鎭守府將軍良望、後には國香と改む。國香より正盛に至るまで六代は、諸國の受領たりしかども、殿上の仙籍をば未だ許されず。

二　殿上の闇討の事

しかるに忠盛、未だ備前守たりし時、鳥羽の院の御願、得長壽院を造進して、三十三間の御堂を建て、一千一體の御佛をすゑ奉らる。供養は天承元年三月十三日なり。勸賞には闕國を賜ふべき由仰せ下されける。折ふし但馬國のあきたりけるをぞ下されける。上皇なほ御感のあまりに、内の昇殿を許さる。忠盛三十六にて始めて昇殿す。

上皇
鳥羽上皇。

五節豐明
新嘗祭の翌日群臣に宴を賜ふを豐明節會といふ。其時五節といつて舞姫五人で舞樂を奏する。

雲の上人これを猜み憤り、同じき年の十一月二十三日、五節豐明の節會の夜、忠盛を闇討にせんとぞ議せられける。忠盛、この由を傳へ聞きて、「われ右筆の身にあらず、武勇の家に生れて、今不慮の恥にあはんこと、家の爲、身の爲、心うかるべし。詮ずる所、身を全うして君に仕へ奉れとこそいふ本文あり。」とて、かねて用意をいたす。參内のはじめより、大きなる鞘卷を用意し、束帶の下にしどけなげにさしほらし、火のほのぐらき方に向ひて、やはらこの刀を拔き出いて、鬢に引き當てられたりけるが、よそよりは氷などのやうにぞ見えける。諸人目をすましけり。

又忠盛の郎黨、もとは一門たりし平木工助貞光が孫、進の三郎大夫家房が子に、左兵衞尉家貞といふものあり。薄青の狩衣の下に、萌黃縅の腹卷を著、欄袋つけたる太刀脇ばさんで、殿上の小庭に畏つてぞ候ひける。貫首以下あやしみをなして、「うつぼ柱より內、鈴の綱の邊に、布衣の者の候ふは何者ぞ。狼藉なり。とうとうまかり出でよ。」と、六位を以ていはせられたりければ、家貞畏つて申しけるは、「相傳の主備前守殿の、今夜闇討にせられ給ふべき由承つて、そのならんやうを見んとて、かくて候ふなり。えこそ出でまじ。」とて、また畏つてぞ候ひける。これらをよしなしごや思はれけん、その夜の闇討なかりけり。

忠盛また御前の召に舞はれけるに、人々、拍子をかへて、「伊勢へいじはすがめなりけり。」とぞはやされける。「かけまくもかたじけな

貫首
藏人頭のこと。

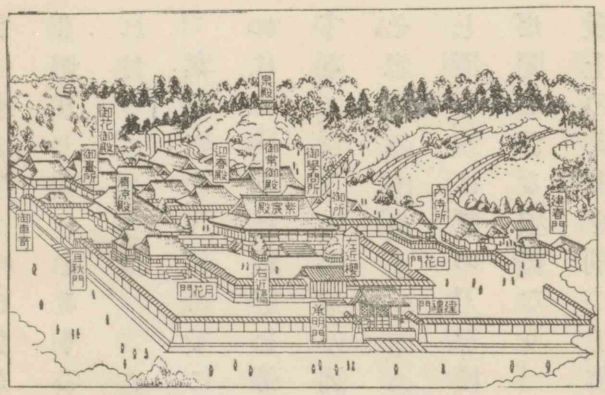
うつぼ柱
殿上のきざはしの際にある柱。中をくつて雨水を落す。

鈴の綱
藏人が舍人を呼ぶ爲に殿上より校書殿へわたしてある鈴のついた綱。

柏原の天皇
桓武天皇。

主殿司
宮中の御殿のことを掌る役所。

く、この人々は柏原の天皇の御末とは申しながら、中頃は都の住居もうとくしく、地下にのみふるまひなつて、伊勢國に住國ふかかりしかば、その國の器にこと寄せて、伊勢へいじこそはやされける。その上、忠盛の日のすがまれたりける故にこそ、かやうにははやされけるなれ。忠盛いかにすべきやうもなくして、御遊も未だ終らざるさきに、御前を罷り出でらるとて、紫宸殿の御後にして、人々の見られける所にて、横たへさゝれたりける腰の刀をば、主殿司に預け置きてぞ出でられける。家貞待受け奉り


紫宸殿
清涼殿
御學問所
內侍所
內侍所
內侍

て、「さていかゞ候ひつるやらん。」と申しければ、かうともいはまほしうは思はれけれども、まさしういひつる程ならば、やがて殿上までも切り上らんずるものゝ面魂にてある間、「別の事なし。」とぞ答へられける。

案の如く、五節はてにしかば、院中の公卿殿上人、一同に訴へ申されけるは、「それ雄劍を帶して公宴に列し、兵仗を賜ひて宮中を出入するは、皆これ格式の例を守る、綸命のよしある先規なり。しかるを忠盛、朝臣、或は年頃の郎從と號して、布衣の兵を殿上の小庭に召し置き、或は腰の刀を横たへさいて、節會の座に列る。兩條奇態、未だ聞かざる狼藉なり。事既に重疊せり、罪科最も遁れ難し。早く殿上の御簡を削つて、解官停任行はるべきか。」と、諸卿一同に訴へ申されければ、上皇大きに驚かせ給ひて、忠盛を御前へ召して御尋ね

殿上の御簡　昇殿を許された者は、その名を日給簡といふ札に記して殿上に置いた。

あり。

陳じ申されけるは、「まづ郎從小庭に伺候の由、全く覺悟仕らず。但し近日人々相たくまるゝ旨、仔細あるかの間、年頃の家人、事を傳へ聞くかによつて、その恥を助けんが爲に、忠盛には知らせずして、ひそかに參候の條、力及ばざる次第なり。もし咎あるべくば、かの身召し進ずべきか。次に刀の事は、主殿司に預け置き候ひをはんぬ。これを召し出され、刀の實否によつて、咎のとかう行はるべきか。」と申されたりければ、この儀最も然るべしとて、急ぎかの刀を召し出でて叡覽あるに、上は鞘卷の黑う塗つたりけるが、中は木刀に銀箔をぞ押いたりける。「當座の恥辱を遁れんが爲に、刀を帶する由あらはすといへども、後日の訴訟を存じて、木刀を帶しける用意の程こそ神妙なれ。弓箭にたづさはらんほどの者の謀には、最も

かうごそ、あらまほしけれ。かねてはまた郎從小庭に伺候のこと、かつうは武士の郎黨のならひなり。忠盛が咎にあらず。」とて、かへつて叡感に預りし上は、敢て罪科の沙汰はなかりけり。（卷一）

三　教訓の事

太政入道
平清盛。

嚴島大明神
廣島縣佐伯郡嚴島にある。市杵島姫命を主神とする。

貞能
平家貞の子。

太政の入道は、かやうに、人々あまた縛め置きても、なほ心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に、黑絲縅の腹卷の、白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに、靈夢を蒙つて、嚴島の大明神よりうつゝに賜はられたりける、銀のひるまきしたる小長刀、常の枕を放たず立てられしを、脇にはさみ、中門の廊にぞ出でられたる。大方、その氣色ゆゝしうぞ見えし。「貞能」と召す。筑後守貞能は、木蘭地の直垂に、緋縅の鎧きて、御前に畏まつてぞ候

平右馬助
平忠正。清盛の叔父。

新院
崇德上皇。

一の宮
重仁親王。

故刑部卿
平忠盛。

故院
鳥羽院。

院
後白河法皇。

內
二條天皇。

經宗
藤原經宗。

惟方
藤原惟方。

ひける。入道宣ひけるはいかに貞能、この事いかゞ思ふぞ。保元に、平右馬助を始として、一門半過ぎて、新院の御方に參りにき。一の宮の御事は、故刑部卿の養君にてまし〳〵しかば、旁見放ち參らせ難かりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先をかけたりき。

平重盛

これ一つの奉公。次に、平治元年十二月、信頼・義朝が謀反の時、院內を取り奉つて大內にたてこもり、天下暗闇となつたりしにも、入道、隨分身を捨てゝ凶徒を追ひ落し、經宗・惟方を召しいましめしに至るまで、君の御爲に、既に命を失はんとする事、度々に及ぶ。されば、人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代

成親　大納言藤原成親。
西光　俗名藤原師光。
當家　平氏。
鳥羽の北殿　鳥羽殿の内にある。鳥羽殿は京都府紀伊郡上鳥羽村。城南の離宮。
入道　清盛。
小松殿　重盛の邸。
大臣　内大臣重盛。

までは思召し捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不當人が申す事に、君のつかせ給ひて、動もすれば、この一門滅ぼさるべきよしの御結構こそ然るべからね。この後も、讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後はいかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎭めん程、法皇をば、鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて、北面の者共が、中より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと、侍どもに觸るべし。大方は入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍置かせよ。きせながが取り出せ。」とこそ宣ひけれ。

主馬判官盛國、急ぎ、小松殿へ馳せまゐつて、「世は、はやかう候。」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「あゝはや、成親卿の頭刎ねられた

法住寺殿　京都下京區瓦町三十三間堂の東にあつた。
禪門　入道をさす。
西八條殿　清盛の邸。

んな。」と宣へば、「その儀にては候はねども、入道殿の御きせながを召され候上は、侍どもも、皆打ち立つて、只今、院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出で立ち候ひつれ。『暫く、世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移しまゐらするか。然らずば、是へまれ、御幸をなし參らせう』とは候へども、内々は、鎭西の方へ流し參らせんとこそ、議せられ候ひつれ。」と申しければ、大臣、何に依りて、只今さる事のおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂はしきこともやおはすらんとて、急ぎ、車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。門前にて、車より下り、門の中へさし入りて見給ふに、入道腹卷を著給ふ上、一門の卿相・雲客數十人、各、色々の直垂に、思ひ〳〵の鎧著て、中門の廊に、二行に著座せられたり。その外、諸國の受領・衞府・諸司などは、緣に居こぼれ、庭にもひしと並み居たり。旗竿ども引きそば

め引きそばめ馬の腹帶をかため、冑の緒をしめ、只今皆打ち立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子直衣に、大文の指貫のそばを取つて、さやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

入道、ふしめになつて、あはれ、例の內府が、世をへうする樣に振舞ふ者かな。大いに諫めばやと思はれけれども、さすが、子ながらも、內には、五戒を保つて、慈悲を先とし、外には、五常を亂らず、禮義を正しうし給ふ人なれば、あの姿に、腹卷を著て向はんこと、さすがおもはゆう恥かしうや思はれけん、障子を少し引き立て、腹卷の上に、素絹の衣を、あわてぎに著給ひたりけるが、胸板の金物の、少しはづれて見えけるを隱さうと、頻りに衣の胸を引違へ〳〵ぞし給ひける。

大臣は、舍弟宗盛の卿の座上につき給ふ。入道宣ひ出さるゝこともなく、大臣も、又申し上げらるゝ旨もなし。

內府　內大臣。重盛たさす。

五戒　不殺生戒・不偸盜戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒。

五常　仁・義・禮・智・信。

やゝあつて、入道宣ひけるは、「あの成親卿が謀反は、事の數にも候はず。一向、法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵とぞ泣かれける。入道、「さていかにやいかに。」とあきれ給へば、やゝあつて、大臣涙を抑へて、「この仰承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、かならず惡事を思ひ立ち候ふなり。又、御有樣を見まゐらせ候に、さらに現とも覺えず候。さすが我が朝は、邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしより以來、太政大臣の官に至る人の、甲冑を鎧ふこと、禮儀を背くにあらずや。就中、御出家の御身なり。それ、三世の諸佛、解脫幢相の法

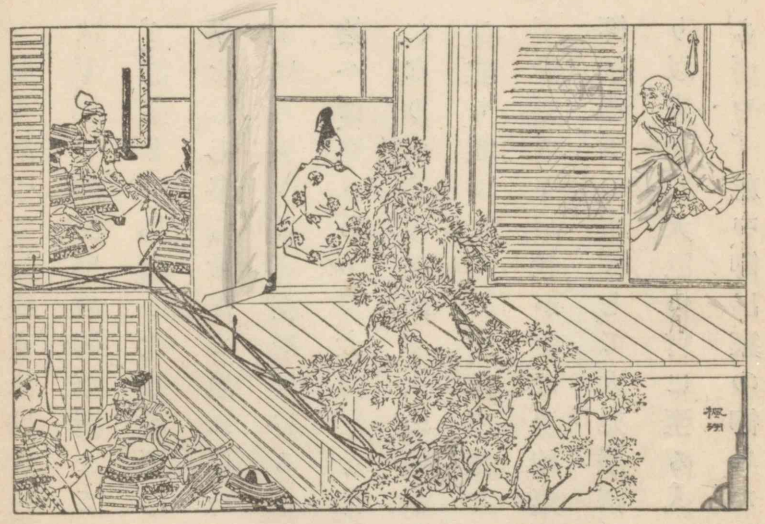
邊地粟散の境　小國を指す。「粟散ハ卽チ小國小主散ニ天下ニ如ノ粟多也。」（楞嚴經）

天兒屋根命　藤原氏の祖。

解脫幢相の衣　幢幡が物を示すやうに出離解脫を求めることを示す佛道修行者の衣。卽ち僧衣。

しいしゆ
旨趣。

普天の下
普天之下莫レ非ニ王土一、率土之濱莫レ非ニ王臣一。（詩經）



重盛父を諫む（松本楓湖筆）

衣をぬぎ捨てゝ、忽ちに、甲冑を鎧ひ、弓箭を帶しましまさんこと、内には、破戒無慚の罪を招くのみならず、外には、仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。旁、恐ある申し事にて候へども、心の底にしいしゆを殘すべきにも候はず。まづ、世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。その中に、尤も重きは朝恩なり。普天の下王地にあらずといふことなし。

潁川の水に
許由は堯が天下を讓らうといふのを聞いて耳が汚れたといふので潁水で洗つたことが隱逸傳に出てゐる。

首陽山に
武王已平ニ殷亂一、天下宗レ周。而伯夷叔齊恥レ之、義不レ食ニ周粟一。隱ニ於首陽山一、采レ薇而食レ之。遂餓ニ死於首陽山一。（史記伯夷傳）

蓮府
丞相大臣などをいふ。

槐門
三公をいふ。「面ニ三槐一、三公位焉。」（周禮）

されば、彼の潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅命背き難き禮儀をば存知すとこそ承はれ。いかに況や、先祖にもいまだ聞かざつし、太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府・槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ稀代の朝恩にあらずや。今これらの莫大の御恩を思召し忘れさせ給ひて、亂りがはしく法皇を傾け參らせ給はん事、天照大神・正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ、日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。然れば、君の思召し立たせ給ふ所、道理半なきにあらず。中にも、この一門は、代々の朝敵を平げて、四海の激浪を鎭むることは、無雙の忠なれども、その賞に誇ることは、傍若無人とも申しつべし。聖德太子十七箇條の御憲法に、『人、皆心あり。心、各執あり。彼を是

し、我を非し、我を是し、彼を非す。是非の理、誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くにして端なし。是を以て、たとひ人怒るといふとも、却つて、我が咎を恐れよ。』とこそ見えて候へ。しかれども當家の運命、未だ盡きざるによつて、御謀反、既に顯れさせ給ひ候ひぬ。その上、仰せ合せらるゝ成親卿を召し置かれぬる上は、たとひ、君、いかなる不思議を思召し立たせ給ふとも、何の恐れか候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は、退きて、事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には、愈、奉公の忠勤をつくし、民のためには、益、撫育の愛憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば、君も思召し直すこと、などか候はざるべき。君と臣とを比ぶるに、親疎わく方なし。道理と僻事を並べんに、いかでか道理につかざるべき。これは、尤も君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し參らせ候ふべし。その故は、重盛、はじめ叙爵より今大臣の大將にいたるまで、しかしながら、君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも越え、その恩の深き色を按ずるに、一入再入の紅にも猶過ぎたらん。然らば院中へ參り籠り候ふべし。その儀にて候はば、重盛が身に代り、命に代らんと契りたる侍共、少々候ふらん。これ等を召し具して、院の御所法住寺殿を守護し參らせ候はば、さすがに以ての外の御大事にてこそ候はんずらめ。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八萬の巓よりもなほ高き父の恩、忽ちに忘れんとす。いたましきかな、不孝の罪をのがれんとすれば、君の御爲には既に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へがたし。申し受くる所詮は、只重盛

千顆萬顆の瑩レ日瑩レ風、高低千顆萬顆之玉、染レ枝染レ波、表裏一入再入之紅。（和漢朗詠集、菅原文時）

迷盧八萬の巓
迷盧に蘇迷盧の略で須彌山のこと、高さ八萬由旬あるといふ。

蕭何は
漢高祖の臣蕭何が、高祖に、上林苑中の空地を人民に貸し與へて田を作らせようと言上したところ、高祖が怒つて罪したことをいふ。

富貴の家
常觀ニ富貴之家一、祿位重疊。猶ニ再實之木一、其根必傷一。（後漢書、馬皇后傳）

が首を召され候へ。「その故は、院參の御供をも仕るべからず。又院をも守護し參らすべからず。」されば、彼の蕭何は大功かたへに越えたるによりて、官、大相國にいたり、劍を帶し履をはきながら、殿上へ上ることを許されしかども、叡慮に背く事ありしかば、高祖、重ういましめて、深う罪せられにき。かやうの先蹤を思へば、富貴といひ榮花といひ、朝恩と申し重職といひ、旁、極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。『富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木はその根必ずいたむ。』と見えて候。心細くこそ候へ、何時までか命生きて、亂れん世をも見候ふべき。たゞ末代に生を受けて、かゝる憂き目にあひ候ふ重盛が果報のほどこそつたなう候へ。只今も、侍一人に仰せつけられ、御壺の內へ引出されて、重盛が頭の刎ねられんずることは、いと易いほどの御事でこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。」とて、直衣の袖もしぼるばかりにかきくどき、さめ〴〵と泣き給へば、その座に並み居給へる平家一門の人々、皆袖をぞぬらされける。（卷二）

四　足摺の事

鬼界島
硫黃島のことであらう。鹿兒島縣大島郡に屬する。

流人共
成經・康賴・俊寬の三人。

宰相
參議平教盛。成經の舅。

七月
治承四年（一八四〇）。

丹波少將
成經。成親の子。

さる程に、鬼界島の流人共の、召し還さるべき事定まりしかば、入道相國の赦文書いてぞたうでける。御使、既に都をたつ。宰相餘りの嬉しさに、御使に、私の使を添へて下されける。夜を晝にし、急ぎ下れとありしかども、心に任せぬ海路なれば、浪風を凌いでゆく程に、都をば七月下旬に出でたれども、長月廿日頃にぞ鬼界島には著きにける。御使は丹左衞門尉基康といふ者なり。急ぎ船より上り、「これに、都より流され給ひたりし平判官康賴入道・丹波少將殿

熊野詣　二人が島内に熊野權現を勸請し之に詣でたのである。

波旬　魔王の名。常に惡意を懷き惡法を成就し僧を擾し人の慧命を斷つといふ。

中宮　高倉天皇の皇后。淸盛の女、平德子。

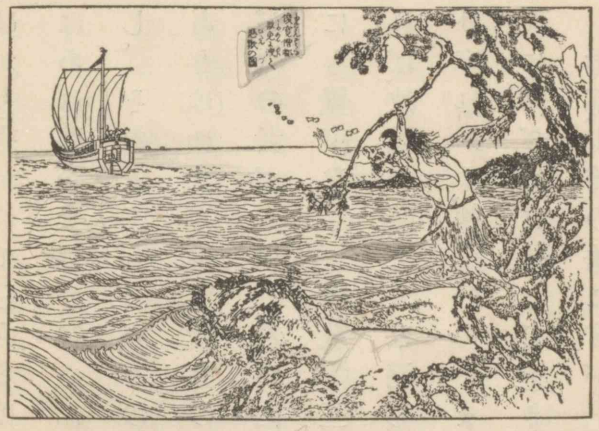
やおはす。」と聲々にぞたづねける。二人の人々は、例の熊野詣してなかりけり。俊寛一人ありけるが、これを聞いて餘りに思へば、夢やらん、又、天魔波旬の我が心を誑さんとていふやらん、現とも更に覺えぬものかなとて、あわてふためき、走るともなく倒るゝともなく、急ぎ御使の前に行き向つて、「これこそ流されたる俊寛よ。」と名告り給へば、雜色が頸に懸けさせたる布袋より、入道相國の赦文を取り出でて奉る。これをあけて見給ふに、「重科は遠流に免ず。早く歸洛の思をなすべし。今度中宮御產の御祈によつて非常の赦行はる。然る間、鬼界島の流人少將成經、康賴法師、赦免。」とばかり書かれて、俊寛といふ文字はなし。禮紙にぞあるらんとて、禮紙を見るにも見えず。奥より端へ讀み、端より奥へ讀みけれども、二人とばかり書かれて、三人とは書かれず。さる程に少將や康賴法師も出

故大納言殿　藤原成親。

できたり、少將の取つて見るにも、康賴法師が讀みけるにも、二人とばかり書かれて、三人とは書かれざりけり。夢にこそかゝることはあれ、夢かと思ひなさんとすれば現なり、現かと思へば又夢の如し。その上、二人の人々の許へは、都より言傳てたる文ども、幾らもありけれども、俊寛僧都の許へは、言問ふ文一つもなし。されば、我が緣の者どもは、皆、都の內に跡を止めずなりにけるよと、思ひ遣るにも覺束なし。「抑、我等三人は同じ罪、配所も同じ所なり。いかなれば、赦免の時、二人は召し還されて、一人爰に殘すべき。平家の思ひ忘れかや、執筆のあやまりか。こは如何にしつる事どもぞや。」と天に仰ぎ地に伏して、泣き悲しめどもかひぞなき。

僧都、少將の袂にすがり、「俊寛がかやうになるといふも、御邊の父故大納言殿のよしなき謀叛の故なり。されば外の事と思ひ給ふ

べからず。赦されなければ、都までこそ叶はずとも、せめてはこの船に乗せて、九國の地まで著けて給べ。各〻のこれにおはしつる程こそ、春は燕、秋は田の面の雁の音づるゝやうに、おのづから故郷の事をも傳へ聞きつれ。今より後は何としてか聞くべき。」とて、悶え焦れ給ひけり。



俊寛　足摺

少將「誠にさこそは思しめされ候ふらめ。我等が召し還さるゝ嬉しさも、さる事にては候へども、御有樣を見奉るに、更に行くべき空も覺え候はず。この船に打乘せ奉りて上りたくは候へども、都の御使、如何

にも叶ふまじき由を頻りに申す。その上、赦されもなきに、三人ながら島の内を出でたりなど聞え候はば、なか〳〵惡しう候ひなんず。成經まづ罷り上つて、人々にもよく〳〵申し合せ、入道相國の氣色をも伺ひ、迎に人を奉らん。その程は日頃おはしつるやうに思ひなして待ち給へ。命はいかにも大切のことなれば、たとひこの瀨に洩れさせ給ふとも、終には何か赦免なくて候ふべき。」と、さまざまに慰め宣へども、僧都堪へ忍ぶべうも見え給はず。

さるほどに船いださんとしければ、僧都船に乘りては下りつ、下りては乘りつ、あらまし事をぞし給ひける。少將の形見には夜の衾、康賴入道が形見には一部の法華經をぞ留めける。既に纜解いて船押しいだせば、僧都綱に取りつき、腰になり、脇になり、丈の立つまでは引かれて出づ。丈も及ばずなりければ、僧都船に取りつき、

法華經　八卷。姚秦の世、鳩摩羅什が譯した。一部二十八品より成る。前十四品を迹門とし後十四品を本門とする。

「さて、各、俊寛をば終に捨て果て給ふか。日頃の情も今は何ならず。赦されなければ都までこそ叶はずとも、せめてこの船に乘せて九國の地まで。」と、口説かれけれども、都の御使「如何にも叶ひ候ふまじ。」とて、取り附き給ひつる手を引きのけて、船をば終に漕ぎ出す。僧都せん方なさに、渚に上り、倒れ伏し、稚きものの乳母や母などを慕ふやうに足摺をして、「これ乘せて行け、具して行け。」と宣ひて、をめき叫び給へども、漕ぎ行く船の習にて、跡は白波ばかりなり。未だ遠からぬ船なれども、涙に暮れて見えざりければ、僧都高き所に走り上り、沖の方をぞ招きける。かの松浦佐用姫が、唐船を慕ひつゝ領巾振りけんも、これには過ぎじとぞ見えし。さる程に船も漕ぎ隱れ、日も暮るれども、僧都あやしの臥處へも歸らず、波に、足打ち洗はせ、露に萎れて、その夜は其處に明かしける。さりとも、少將は情深き人なれば、よき樣に申す事もやと、たのみを懸けて、その瀨に身をも投げざりし、心の中こそはかなけれ。昔、早利・卽利が海巖山へ放たれたりけん悲しみも、今こそ思ひ知られけれ。（卷三）

漕ぎ行く船　世の中を何にたとへんあさぼらけこぎゆく舟のあとの白波（拾遺集）

松浦佐用姫が　宣化帝の朝、大伴狹手彥が任那へ赴かうとする時その妻佐用姫がこれを慕つて領巾をふつたといふ故事。領巾は昔時婦人が頸にまいて飾とした布帛。

早利・卽利が　早利・卽利の兄弟が繼母に欺かれて絕海の孤島に捨てられたことが淨土本緣經に見えてゐる。

五　月見の事

六月九日の日新都の事始、八月十日の日上棟、十一月十三日遷幸と定めらる。舊き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す。あさましかりつる夏も暮れて、秋にも既になりにけり。秋もやう〳〵半ばになり行けば、福原の新都にまし〳〵ける人々、名所の月を見んとて、或は、源氏の大將の昔の跡を忍びつゝ、須磨より明石の浦傳ひ、淡路の迫門をおし渡り、繪島が磯の月を見る。或は白浦・吹上・和歌の浦・住吉・難波・高砂・尾上の月の曙を眺めて歸る人もあり。舊都に殘る

六月九日　治承四年（一八四〇）。

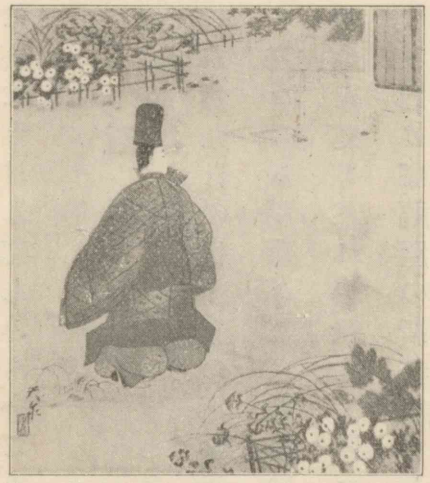
新都　福原。兵庫縣武庫郡。內裏址は兵庫岡方の西、長田の東にある。

舊都　京都。

源氏の大將　源氏物語の主人公光君。

淡路の迫門　兵庫縣明石と淡路島の松尾崎との間にある明石海峽。

人々は、伏見・廣澤の月を見る。中にも德大寺の左大將實定卿は、舊き都の月を戀ひつゝ、八月十日あまりに、福原よりぞ上り給ふ。何事も皆變りはてて、稀にのこる家は、門前草深くして、庭上露茂し。蓬が杣、淺茅が原、鳥のふしどゝ荒れはてて、蟲の聲々うらみつゝ、黃菊・紫蘭の野邊とぞなりにける。今故郷の名殘とては、近衞河原の大宮ばかりぞまし〳〵ける。大將その御所へ參り、まづ隨身を以て惣門を叩かせらるれば、內より女房の聲にて、「誰そや蓬生の露打ちはらふ人もなき所に。」と咎むれば、「これは、福原より、大將殿の御のぼり候ふ。」と申す。「さ候はば、惣門は、鑰のさゝれて候ふぞ。東の小門より入らせ給へ。」と申しければ、大將、さらばとて、東の小門よりぞ參られける。



舊都の月（荻生天泉筆）

大宮は、御つれ〴〵に、昔をや思召し出でさせ給ひけん。南面の御格子あげさせ、御琵琶遊ばされける所へ、大將、つと參られたれば、暫く御琵琶をさしおかせ給ひて、「夢かや現か。これへ〳〵。」とぞ仰せける。昔今の物語どもし給ひて後、小夜もやう〳〵更け行けば、舊き都の荒れゆくを、今樣にこそうたはれけれ。

舊きみやこを來て見れば、淺茅が原とぞあれにける。
月のひかりはくまなくて、あき風のみぞ身にはしむ。

と押し返し〳〵三返謠ひすまされたりければ、大宮を初め奉つて、御所中の女房たち、皆袖をぞぬらされける。さる程に、夜もやうやう明け行けば、大將いとま申しつゝ、福原へぞ歸られける。（卷五）

繪島が磯　淡路の北端岩屋町の東端。
白浦　和歌山縣日高郡。
吹上・和歌の浦　同縣海草郡。
住吉・難波　大阪府東成郡。
高砂・尾上　兵庫縣加古郡。
伏見　京都府紀伊郡。
廣澤　京都府葛野郡嵯峨村の東にある池。
近衞河原の大宮　近衞河原は鷹司の下近衞通の東河原。大宮は皇太后藤原多子、實定の妹。

實盛　壽永二年五月加賀の篠原の戰に敗死。

木曾殿　木曾義仲。

手塚太郎　義仲の將。

六　實盛最期の事

落ち行く勢の中に、武藏の國の住人長井の齋藤別當實盛は、存ずる旨ありければ、赤地の錦の直垂に、萌黃縅の鎧著て、鍬形打つたる冑の緒をしめ、金作りの太刀を帶き、二十四指いたる、截生の矢負ひ、滋籐の弓持つて、連錢葦毛なる馬に、金覆輪の鞍を置いて乘つたりけるが、身方の勢は落ちゆけども、唯一騎、返し合せ〳〵防ぎ戰ふ。木曾殿の方より、手塚太郎進み出でて、「あなやさし。いかなる人にて渡らせ給へば、身方の御勢は皆落ち行き候ふに、唯一騎殘らせ給ひたるこそ、優に覺え候へ。名告らせ給へ。」と、詞を懸けければ、「まづ、かういふ和殿は誰そ。」「信濃國の住人手塚太郎金刺光盛。」とこそ名告つたれ。齋藤別當、「さては、互によき敵。但し、和殿を下ぐるには

組んでうずよなうれ　組んで失すよ、なおのれの詞といふ。

あらず、存ずる旨があれば、名告ることはあるまじいぞ。よれ組まう、手塚。」とて、馳せ並ぶるところに、手塚が郎等、主を討たせじと中に隔り、齋藤別當に押並べて、むずと組む。齋藤別當、「あつぱれ己は日本一の剛の者と組んでうずよなうれ。」とて、我が乘つたりける鞍の前輪に押しつけて、些かも働かさず、頸かき切つて捨ててげる。手塚太郎、郎等が討たるゝを見て、弓手に廻りあひ、鎧の草摺引き上げて、二刀刺し、弱る所を組んで伏す。齋藤別當、心は猛う思へども、軍にはし勞れぬ、手は負ひつ、その上、老武者ではあり、手塚が下にぞなりにける。

手塚太郎、馳せ來る郎等に首取らせ、木曾殿の御前に參り畏つて、「光盛こそ、奇異の曲者と組んで、討つて參つて候へ。侍かと見候へば、錦の直垂を著て候。又、大將軍かと見候へば、續く勢も候はず。

糟尾　白髪交りのかみ。
樋口兼光　義仲の傅である中原兼遠の長男。弟兼平、根井行親、楯親忠と倶に木曾の四天王と稱せられた。

名告れ〳〵と責め候ひつれども、遂に名告り候はず。聲は坂東聲にて候ひつる。」と申しければ、木曾殿「あつぱれ、これは齋藤別當にてあり、ござんなれ。それならんには義仲が、上野へ越えたりし時、稚目に見しかば、白髪の糟尾なつしぞかし。今は早七十にも餘り、白髪にこそなりぬらんに、鬢鬚の黑いこそ怪しけれ。樋口次郎兼光は、年來馴れ遊んで、見知りたるらん。樋口召せ。」とて召されけり。

樋口次郎、唯一目見て、「あな無慚、齋藤別當にて候ふなり。」とて涙を流す。木曾殿「それならんには早七十にも餘り、白髪にこそなりぬらんに、鬢鬚の黑いはいかに。」と宣へば、良あつて、樋口次郎涙を抑へて申しけるは、「さ候へば、その樣を申し上げんと仕り候ふが、餘りに哀に覺え候うて、まづ、不覺の泪のこぼれ候ひけるぞや。されば、弓矢取は、聊かのところにても、思ひ出の言をば、かねてつかひ置くべ

大臣殿　内大臣平宗盛。
水鳥の羽音に驚く　富士川の戰に水禽の音をきいて平氏の敗走したこと。
蒲原　庵原郡。

き事にて候ひけるぞや。齋藤別當、常は兼光に逢うて物語し候ひしは、『六十に餘つて軍の陣へ向はん時は、鬢鬚を黑う染めて若やがうと思ふなり。その故は、若殿原に爭うて、先を驅けんもおとなげなし。又老武者とて、人の侮らんも口惜しかるべし。』と申し候ひしが、誠に染めて候ひけるぞや。洗はせて御覽候へ。」と申しければ、木曾殿「さもあるらん。」とて、洗はせて御覽ずれば、白髪にこそなりにけれ。

又、齋藤別當、錦の直垂を著ける事も、最後の暇申しに、大臣殿へ參つて、「かう申せば、實盛が身一つにては候はねども、先年坂東へ罷り下り候ひし時、水鳥の羽音に驚き、矢一つをだに射ずして、駿河の蒲原より逃げ上つて候ひし事、老の後の恥辱、唯、この事に候。今度、北國へ罷り下り候はば、定めて討死仕り候ふべし。實盛元は越前國

故郷へは錦
富貴不レ歸ニ故郷一、如ニ衣レ錦夜行。（漢書朱買臣傳）

昔の朱買臣は漢の朱買臣が貧家より身を起して武帝に仕へ故郷會稽の太守に拜せられたことが漢書朱買臣傳に出てゐる。

會稽山　支那浙江省。

の者にて候ひしが、近年御領に附けられて、武藏國長井に居住仕り候ひき。事の譬の候ぞかし。故郷へは錦を著て歸ると申すことの候へば、なにか苦しう候べき、錦の直垂を御免候へかし。」と申しければ、大臣殿、「優しうも申したりけるものかな。」とて、錦の直垂を御免ありけるとぞ聞えし。昔の朱買臣は、錦の袂を會稽山に翻し、今の齋藤別當實盛は、その名を、北國の巷に揚ぐとかや。朽ちもせぬ、空しき名のみ留め置いて、骸は、越路の末の塵となるこそ哀なれ。

去んぬる四月十七日、平家十萬餘騎にて都を出でし事柄は、何、面を向くべしとも見えざりしに、今五月下旬に都へ歸り上るには、その勢僅かに二萬餘騎、「流を盡して漁る時は、多くの魚を得ると雖も明年に魚なし。林を燒いて獵る時は、多くの獸を得ると雖も明年に獸なし。後を存じて、少々殘さるべかりけるものを。」と、申す人々もありけるとかや。（卷七）

忠度　忠盛の子。清盛の弟。正四位下薩摩守。

俊成　正三位藤原俊成。和歌の名手。千載集の撰者。

七　忠度都落の事

薩摩守忠度は、いづくよりか歸られたりけん、侍五騎、童一人、我が身共に混冑七騎取つて返し、五條の三位俊成卿の許におはして見たまへば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名告り給へば、落人還り來れりとて、その内騒ぎあへり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り、自ら高らかに申されけるは、「これは三位殿に申すべき事ありて、忠度が參つて候。たとひ門をば開けられずとも、この際まで立寄りたまへ。申すべき事の候。」と申されたりければ、俊成卿、「その人ならば苦しかるまじ、開けて入れ申せ。」とて、門を開けて對面ありけり。事の體、何となうものあはれなり。薩摩守申されけるは、「先年申し承つ

てより後は、ゆめ〳〵疎略を存ぜずとは申しながら、この二三箇年は、京都の騷ぎ國々の亂れ出で來、剩へ、當家の身の上に罷りなつて候へば、常に參り寄ることも候はず。君、既に帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命、今日はやつき果て候。それにつき候ひては、撰集の御沙汰あるべき由、承つて候ひし程に、生涯の面目に、一首なりとも、御恩を蒙らうと存じ候ひつるに、かゝる世の亂れ出で來て、その沙汰なく候條、唯一身の歎きと存ずる候。この後、世靜つて、撰集の御沙汰候はば、これに候ふ卷物の中に、さりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩を蒙つて、草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御守ここそなりまゐらせ候はんずれ。」とて、日來よみ置かれたる歌どもの中に、秀歌と覺しきを百餘首書き集められたりける卷物を、今はとて打ち立たれける時、これを取つて持たれたりけるを、鎧の引合より取り出でて、俊成卿に奉らる。

撰集　勅撰和歌集。

鎧の引合　鎧の右脇で脇楯の上に引合はす所。

三位、之を開いて見給ひて、「斯る忘形見どもを賜り候上は、ゆめゆめ疎略を存ずまじう候。扨も只今の御渡こそ、情も深う哀も殊にすぐれて、感涙抑へ難うこそ候へ。」と宣へば、薩摩守、「骸を野山に曝さば曝せ、憂名を西海の波に流さば流せ、今は憂世に思ひ置くことなし。さらば暇申して。」とて、馬に打乘り冑の緒をしめて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位、後を遙かに見送つて立たれたれば、忠度の聲と覺しくて、「前途程遠し、思を雁山の夕の雲に馳す。」と高らかに口ずさみ給へば、俊成卿もいとゞ哀に覺えて、涙を抑へて入り給ひぬ。

その後、世靜まつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有樣、言ひ置きし言の葉、今更思ひ出でて哀なりけり。件の卷物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、その身勅勘の人なれば、名字

前途程遠　前途程遠馳ニ思於雁山之暮雲ニ。後會期遙霑ニ纓於鴻臚之曉涙ニ。（和漢朗詠集、大江朝綱）

雁山　支那の雁門山。

千載集　後白河院の院宣によつて藤原俊成が撰した。

をば顯されず、「故郷花」といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、「讀人知らず」と入れられたる。

さゞなみや志賀の都はあれにしを
むかしながらの山ざくらかな

その身朝敵となりぬる上は、仔細に及ばずといひながら、恨めしかりし事どもなり。（卷七）

志賀の都　今の大津町の邊。天智弘文の朝皇居のあつた處。
ながらの山　近江の西南にある山。

八　那須與一の事

さる程に阿波・讃岐に平家を背いて、源氏を待ちける兵共、あそこの嶺、こゝの洞より、十四五騎・二十騎、うち連れ〳〵馳せ來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。「今日は日暮れぬ。勝負を決すべからず。」とて、源平互に引き退く處に、沖より尋常に飾つたる小船

判官　源義經。檢非違使の尉であつたのでいふ。
今日は　文治元年二月十八日。

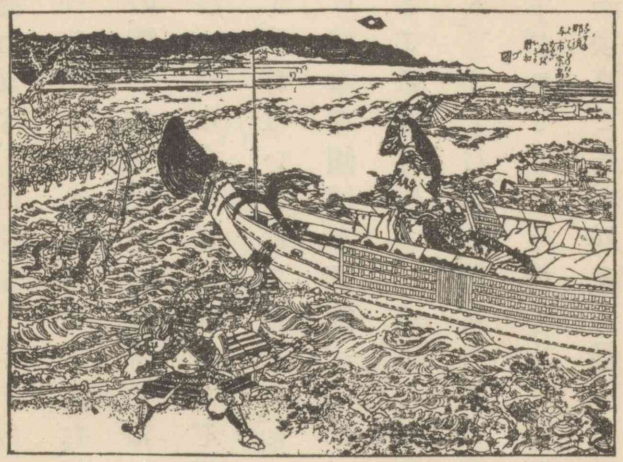
一艘、汀へ向けて漕ぎよせ、渚より七八段許にもなりしかば、船を横様になす。

あれはいかにと見る處に、船の中より年の齡十八九許なる女房の、柳の五衣（いつゝぎぬ）に紅の袴著たるが、皆紅（みなくれなゐ）の扇の日出したるを船のせがひに挾み立て、陸に向つてぞ招きける。判官、後藤兵衞實基を召して、「あれはいかに。」と宣へば、「射よとこそ候ふらめ。但し、大將の矢面に進んで傾城を御覽ぜられん處を、手だれに狙つて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや候ふらん。」と申しければ、判官「身方に、射つべき仁は誰かある。」と問ひ給へば、「手だれども多う候ふ中に、下野の國の住人那須太郎資高が子に、與一宗高こそ、小兵では候へども手はきいて候。」と申す。判官、「證據があるか。」「さん候。かけ鳥などを爭うて、三つに二つは必ず射おと

段　六間。
女房　建禮門院の雜司の玉蟲の前。
柳の五衣　表白く裏の青い色合を柳といふ。五衣は五重である。

し候」と申しければ、判官「さらば與一呼べ」とて召されけり。

與一、その比は未だ二十許の男なり。褐に、赤地の錦を以て、衽・端袖いろへたる直垂に萌黄縅の鎧著て、足白の太刀を帶き、二十四さいたる截生の矢負ひ、薄截生に鷹の羽割り合せてはいだりけるぬための鏑をぞさし添へたる。滋籐の弓脇に挾み、冑をば脱いで高紐に懸け、判官の御前にかしこまる。判官、



「いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし」とのたまへば、與一「仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢の瑕にて候ふべし。一定仕らうずる仁に仰せ附けらるべうもや候ふらん」と申しければ、判官大いに怒つて「今度、鎌倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに、少しも仔細を存ぜん人々は、これよりとう〳〵鎌倉へ歸らるべし」とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば惡しかりなんとや思ひけん。「さ候はば、外れんをば存じ候はず。御諚で候へば、仕つてこそ見候はめ」とて、御前を罷り立ち、黑き馬の太う逞しきに、まろほや摺つたる金覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、弓取り直し手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。身方の兵共、與一の後を遙かに見送つて、「この若者一定仕らうずると覺え候」と申しければ、判官も賴もしげにぞ見給ひける。

足白の太刀
帶取の金具を銀で作つた太刀。

薄截生
薄模樣の截生。

ぬため
鹿角で作つたもの。

まろほや
寄生木の樣なまろくあらはしたもの。

二月十八日　文治元年（一八四五）。

我が國　與一の生國下野國。

日光權現　栃木縣日光山にある二荒神社。事代主命を祭る。

宇都宮　二荒神社別宮がある。

湯泉大明神　同國那須郡那須山にある。

矢比少し遠かりければ、海の中一段許打ち入つたりけれども、なほ扇の間は、七段許もあらんとこそ見えたりけれ。比は二月十八日西の刻許のことなるに、折節、北風烈しう吹きければ、磯打つ波も高かりけり。船は、ゆり上げゆりする。漂へば、扇も、串に定まらずひらめいたり。沖には平家、船を一面に並べて見物す。陸には、源氏、轡を並べてこれを見る。いづれも〳〵、晴ならずといふことなし。與一目を塞いで、「南無八幡大菩薩、別しては、我が國の神明・日光權現・宇都宮・那須の湯泉大明神、願くはあの扇の眞中射させたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二たび面を向ふべからず。今一度本國へ歸さんと思しめさば、この矢はづさせ給ふな。」と、心の中に祈念して目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鏑を取つてつがひ、よつぴいてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三伏、弓は強し、鏑は浦響く程に長鳴して、あやまたず扇の要際一寸許おいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ扇は空へぞ揚りける。春風に一揉二揉もまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日のかゞやくに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬながれけるを、沖には平家、舷をたゝいて感じたり。陸には源氏、箙をたゝいてどよめきけり。（卷十一）

法皇　後白河法皇。

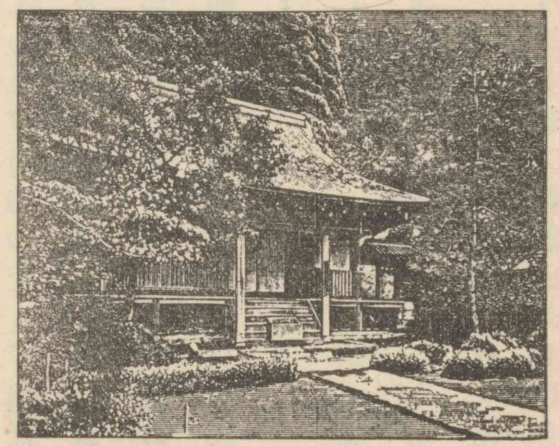
建禮門院　平德子。清盛の二女。高倉帝の皇后。

九　大原御幸の事

かゝりし程に、法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御すまひ、御覽ぜまほしう思召されけれども、二月彌生の程は、嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず。峰の白雪消えやらで、谷のつらゝもう

北祭　賀茂祭をいふ。四月中の酉の日である。
德大寺　實定。
花山院　兼雅。
土御門　通親。
清原深養父　醍醐天皇の御代の人。
補陀落寺　京都府愛宕郡靜原の山麓。
小野皇太后宮　後冷泉帝の皇后藤原歡子。その舊址は愛宕郡小野山附近であるといふ。

ち解けず。かくて春過ぎ夏立つて、北祭も過ぎしかば、法皇、夜をこめて、大原の奥へ御幸なる。忍びの御幸なりけれども、供奉の人々には、德大寺・花山院・土御門以下、公卿六人・殿上人八人・北面少々候ひけり。鞍馬通りの御幸なりければ、かの清原深養父が補陀落寺、小野の皇太后宮の舊址叡覽あつて、それより御輿にぞ召されける。



寂光院本堂

遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日餘の事なれば、夏草の茂みが末をわけ入らせ給ふには、

寂光院　天台宗。延暦寺の別所。

青葉交りの　夏山の青葉交りのおそ櫻初花よりも珍しきかな（金葉集、藤原盛房）

じめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も、思召し知られて哀なり。

西の山の麓に、一宇の御堂あり。卽ち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水・木立、由ある樣の所なり。「甍破れては霧不斷の香を たき、扉落ちては月常住の燈をかゝぐ。」とも、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂り合ひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漾ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波の、叢紫にさける色、青葉交りの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹さき亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顏なり。法皇これを叡覽あつて、

池水にみぎはの櫻ちりしきて
涙の花こそさかりなりけれ

ふりにける岩の絶間より、落ちくる水の音さへ故び、由ある所なり。綠羅の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及び難し。さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦・朝顏這ひかかり葱まじりの萱草、「瓢簞屢空し、草顏淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕す。」ともいひつべし。杉の葺目もまばらにて、時雨も、霜も置く露も、洩る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いさ

建禮門院像

瓢簞屢空
瓢簞屢空、草滋ニ顏淵之巷。藜藿深鎖、雨濕ニ原憲之樞。
（朗詠集、橘直幹）

顏淵
名は回。孔子の弟子。論語に「賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在ニ陋巷一、人不レ堪ニ其憂一、回也不レ改ニ其樂一。」とある

原憲
孔子の弟子。孔子の死後草澤の中に居り自ら淸うした。

さ小篠に風さわぎ、世に立たぬ身の習ひとて、憂節滋き竹柱、都の方の言傳は、間遠に結へるませ垣や、僅かにことづふものとては、嶺に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらがおとづれならでは、まさきの葛青蘿、くる人稀なる所なり。

法皇、「人やある〳〵。」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。稍あつて、老い衰へたる尼一人參りたり。「女院は、いづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この上の山へ花摘みに入らせ給ひて候。」と申す。「さこそ世を厭ふ御習とはいひながら、左樣の事に仕へ奉る人もなきにや、御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒・十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜しませ給ひ候べき。因果經には、『欲知過去因、見其現在果。欲知未來果、見其現在因。』と說かれたり。過去・未來の因果を、かねて悟らせ給ひなば、つや〳〵、御歎あるべからず。昔、悉達太子は十九にて伽耶城を出でて、檀特山の麓にて、木の葉を連ねて膚を隱し、嶺に上つて薪を取り、谷に下りて

五戒
不殺生戒・不偸盜戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒。

十善
不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不綺語・不惡口・不兩舌・不貪欲・不瞋恚・不邪見。

捨身の行
形身を捨離して佛道を修行すること。

因果經
因果應報の例を擧げて教訓した經。宋の求那跋陀羅の譯。四卷。

悉達太子
釋迦の太子であつた時の名。

伽耶城
印度摩羯陀國にある。佛成道の靈地。

檀特山
印度犍陀羅國にある。

信西　俗名藤原通憲。

紀伊二位　紀伊守藤原範元の女朝子で藤原通憲の妻。後白河法皇の乳母であつた。

水を掬び、難行苦行の功に依つてこそ、遂に成等正覺し給ひき。」とぞ申しける。

この尼の有様を御覽ずれば、身には絹・布のわきも見えぬものを結び集めてぞ著たりける。あの有様にても、かやうの事申す不思議さよと思召して、「抑、汝はいかなるものぞ。」と仰せければ、この尼さめ〴〵と泣いて、暫しは御返事にも及ばず。やゝあつて涙を抑へて、「申すにつけて憚覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波内侍と申す者にて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。」とて、袖を顏に押し當てて、忍びあへぬ樣目も當てられず。法皇、「げにも汝は阿波内侍にてあるござんなれ、御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、唯夢と

來迎の三尊　阿彌陀如來・勢至菩薩・觀世音菩薩をいふ。

中尊　三尊の中央に立つ阿彌陀如來。

普賢菩薩　華嚴三聖の一。釋迦佛の右の脇士。普通白象に乘つたさまに描かれる。

善導和尚　隋の名僧。淨土の教義を鼓吹した人。

八軸の妙文　法華經。八卷ある

九帖の御書　善導の觀無量壽經の疏。九卷ある。

のみこそ思召せ。」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿・殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、理にて申しけりとぞ感じ合はれける。

さて、彼方此方を叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつつ、外面の小田も水越えて、鳴立つ隙も見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて叡覽あるに、一間には、來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれた

花岩　みたがた正田（筆已）

淨名居士　維摩詰。釋迦佛の弟子で方丈の室に三萬二千の諸佛を請來したといふ。

大江定基　永延二年入道、長保四年宋に渡つた。圓通大師の號を賜はる。

清涼山　五臺山ともいふ。支那山西省にある。

り。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。かの淨名居士が方丈の室の内に、三萬二千の床を並べ、十方の諸佛を請じ給ひけんも、かくやとぞ覺えける。障子には、諸經の要文ども、色紙に書いて所々に押されたり。その中に大江定基法師が、清涼山にして詠じたりけん、「笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前。」とも書かれたり。少し引き退けて、女院の御歌とおぼしくて、

思ひきや深山の奥にすまひして
くもゐの月をよそに見むとは

さて傍を叡覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾なんどかけられたり。さしも本朝・漢土の妙なる類、數を盡し、綾羅錦繡の粧も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり見奉りし事共、今の様に覺

えて、皆袖をぞ絞られける。

やゝあつて、上の山より、濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝ、下り煩ひたる様なりけり。法皇「あれはいかなる者ぞ。」と仰せければ、老尼涙を抑へて「花筐臂にかけ、岩躑躅取り具して持たせ給ひて候は、女院にて渡らせたまひ候。爪木に蕨折り添へて持ちたるは、鳥飼、中納言維實が女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言佐局」と申しもあへず泣きけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、皆、袖をぞ濡らされける。女院は、世を厭ふ御習ひながら、今かゝる有様を見え參らせんずらん恥かしさよ。消えも失せばやと思召せどもかひぞなき。宵々毎の閼伽の水、掬ぶ袂もしをるゝに、曉起の袖の上、山路の露も滋くして、絞りやかねさせ給ひけん。山へも歸らせ給はず、又、御庵室へも

入らせおはしまさず、あきれて立たせまし〳〵たる所に、内侍の尼まゐりつゝ、花筐をば賜はりけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候ふべき。はや〳〵御見參あつて、還御なしまゐらせ候へ。」と申しければ、女院、御涙を抑へて、御庵室に入らせおはします。「一念の窓の前には、攝取の光明を期し、十念の柴の樞には、聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かな。」とて、御見參ありけり。（灌頂の卷）

内侍の尼　阿波の内侍。

聖衆　極樂の諸菩薩。

國語讀本　卷七　終

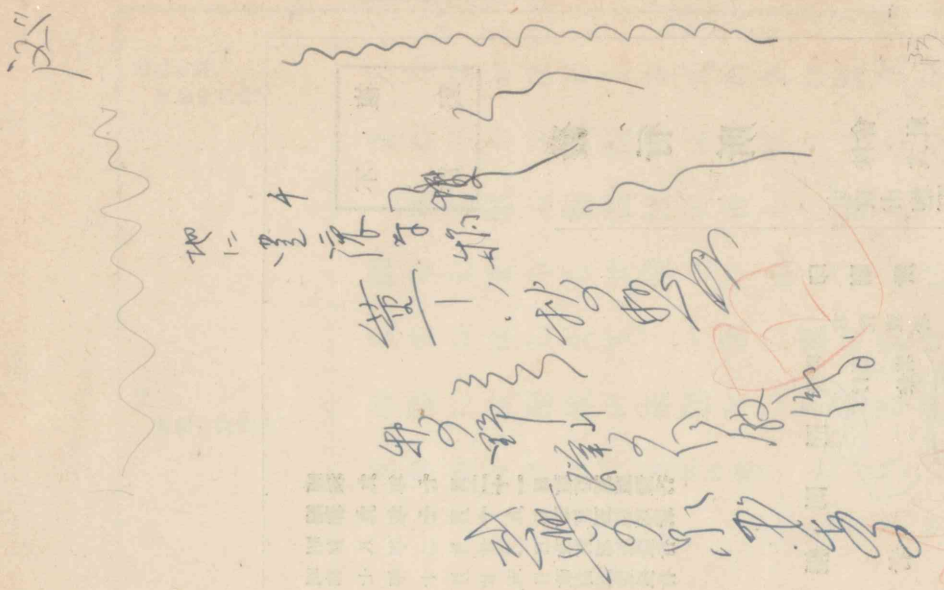
大正十三年十二月十六日印刷
大正十三年十二月十九日發行
大正十四年二月二十一日訂正再版印刷
大正十四年二月廿四日訂正再版發行
昭和三年十一月一日改訂印刷
昭和三年十一月四日改訂發行
昭和四年三月十五日改訂再版發行
昭和七年十月廿五日改訂三版發行
昭和八年二月廿三日改訂四版發行
昭和九年七月十九日改訂五版印刷
昭和九年七月二十一日改訂五版發行

國語讀本新制版
（各卷　定價金六十錢）

編者　上田萬年
同　榮田猛猪
同　鹽野新次郎
發行兼印刷者　株式會社啓成社
右代表者　布津純一
印刷所　啓成社印刷部

東京市麹町區丸ノ内三丁目六番地
株式會社　啓成社
電話丸ノ内(23)二六八六番
振替東京一二〇五五番

不許複製



第五学級
福田義孝